志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

農村総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

穴倉遺跡

(あなくら)

2009年3月

鹿児島県志布志市教育委員会

序　　文

志布志市は、平成１８年１月１日に松山町・志布志町・有明町の三町合併で誕生した市であります。

本市には多くの文化財が存在し、埋蔵文化財の包蔵地についても前川・安楽川・菱田川を中心に５００ヵ所を超える多数の遺跡が確認されています。特に前川・安楽川沿いに縄文時代の遺跡が多いことから「縄文銀座」と称されるほどです。また一方で、志布志は古くから港町として栄え、交易の拠点、交通の要衝として繁栄し、麓地区には多くの武家庭園・寺院庭園が遺されています。これらの庭園のうち、天水氏庭園・平山氏庭園・福山氏庭園は「志布志麓庭園」として国指定名勝となり、鳥濱氏庭園と清水氏庭園は国登録名勝となっています。さらに、志布志をめぐる興亡の歴史を示す中世山城の志布志城跡も国指定史跡に指定されています。

この報告書は、旧有明町教育委員会が主体となって、平成９年度において全面調査を行った成果を志布志市教育委員会がまとめたものであります。
調査の結果、穴倉遺跡からは弥生時代の遺物・遺構及び古墳時代の遺物が多数確認されています。

この発掘調査の成果が、今後の研究資料として活用されるとともに、広く文化財愛護思想の啓発普及等、地域の文化財として地域の文化財として活用され、文化財に対する理解を一層深めることが出来ればと願っております。

最後に、発掘調査に従事していただいた住民の方々をはじめ、現場における調査から出土資料の整理・報告書の刊行に至るまでご指導・ご協力いただきました県教育委員会文化財課をはじめとする各関係機関、その他、多くの先生方並びに関係者の方々に深く感謝申し上げ、刊行の序文といたします。

平成２１年３月吉日

志布志市教育委員会
教育長　坪 田 勝 秀

有明町
大崎町
穴倉遺跡
清水
山重
柳谷
久木迫
抜谷
芝用
田渕
中尾
山重鍋
仮屋
川添
蓬原中野
沢津峰
稲荷下
頭方限
樽野
広域農道
丸岡
岩屋
重田
野神
東原
平山
元平山
西上馬場
中方限
下方限
立本
宮下
草野
宇都鼻
花立
西馬場
蓬原
西大久保
大久保
東大久保
荷返
上大久保
高井田
供養松
中須
中沖東上
中沖東
赤松
上普現堂
普現堂
西普現堂
片平
蓬の郷
原田
西中組
東中組
下原
西下
東下
中沖西
中沖中
中沖南
平良上
西井俣
小能
仮宿
上仮宿
飯神領
益丸
下益丸
高尾
1:50,000
1000m 0 1000 2000 3000

穴倉遺跡の位置

穴倉遺跡　埋蔵文化財発掘調査報告書　目次

序文
穴倉遺跡の位置
例言・凡例

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過……1
　第１節　調査に至る経緯
　第２節　調査の組織
　第３節　試掘調査の成果

第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境……3
　第１節　志布志市の概要
　第２節　地形的環境の概要
　第３節　遺跡周辺の歴史的環境

第Ⅲ章　全面調査の概要……6
　第１節　全面調査の方法
　第２節　層位
　第３節　全面調査の概要
　第４節　発掘調査の成果
　　１　弥生時代・古墳時代の調査
　　２　出土遺物

第Ⅳ章　調査のまとめ……35
　第１節　遺物
　第２節　遺構

図版
報告書抄録

挿　図

第Ⅰ章
第１図　穴倉遺跡　試掘調査遺物……2

第Ⅱ章
第２図　穴倉遺跡　周辺遺跡位置図……4

第Ⅲ章
第３図　穴倉遺跡　グリッド設定図……7
第４図　穴倉遺跡　遺物出土状況　全体図……8
第５図　穴倉遺跡　掘立柱建物１　平面・断面図……9
第６図　穴倉遺跡　Ⅲ層上面検出　遺構配置図
　（Ｈ～Ｋ－４・５区）……10
第７図　穴倉遺跡　土坑１　平面・断面図……11
第８図　穴倉遺跡　Ⅲ層上面　遺構配置図……12
第９図　穴倉遺跡　弥生土器　１……16
第１０図　穴倉遺跡　弥生土器　２……17
第１１図　穴倉遺跡　弥生土器　３……20
第１２図　穴倉遺跡　弥生土器　４……21
第１３図　穴倉遺跡　弥生土器　５……22
第１４図　穴倉遺跡　弥生土器　６……24
第１５図　穴倉遺跡　成川式土器・内黒土器・陶器……26
第１６図　穴倉遺跡　Ⅱ層出土　弥生土器・成川式土器
　遺物出土状況図（Ｂ～Ｆ－１・２区）……27
第１７図　穴倉遺跡　Ⅱ層出土　弥生土器・成川式土器
　遺物出土状況図（Ｆ～Ｋ－４・５区）……28
第１８図　穴倉遺跡　Ⅱ層出土　弥生土器・成川式土器
　遺物出土状況図（Ｉ－４区）……29
第１９図　穴倉遺跡　石器……30
第２０図　穴倉遺跡　Ⅱ層出土　石器出土状況図……30

表

第Ⅰ章
第１表　穴倉遺跡　試掘調査遺物　土器観察表……2

第Ⅱ章
第２表　穴倉遺跡周辺遺跡一覧……5

第Ⅲ章
第３表　穴倉遺跡　掘立柱建物１　計測表……11
第４表　穴倉遺跡　掘立柱建物１内検出　土坑１　計測表……11
第５表　穴倉遺跡　弥生土器　甕１～７類　土器観察表……31
第６表　穴倉遺跡　弥生土器　甕（底）１～３類
　土器観察表……31
第７表　穴倉遺跡　弥生土器　壷１～７類　土器観察表……32
第８表　穴倉遺跡　弥生土器　壷（底）１～４類
　土器観察表……33
第９表　穴倉遺跡　弥生土器　鉢１～３類　土器観察表……33
第１０表　穴倉遺跡　弥生土器　高坏１類　土器観察表……33
第１１表　穴倉遺跡　弥生土器　大甕１～３類　土器観察表…33
第１２表　穴倉遺跡　弥生土器　小型土器１・２類
　土器観察表……34
第１３表　穴倉遺跡　成川式土器　土器観察表……34
第１４表　穴倉遺跡　内黒土器　土器観察表……34
第１５表　穴倉遺跡　陶器　土器観察表……34
第１６表　穴倉遺跡　Ⅱ層出土石器　計測表……34

図　版

図版１　穴倉遺跡　全面調査
図版２　穴倉遺跡　弥生土器　１
図版３　穴倉遺跡　弥生土器　２
図版４　穴倉遺跡　弥生土器　３
図版５　穴倉遺跡　弥生土器　４
図版６　穴倉遺跡　成川式土器・内黒土器・陶器

例　　言

1　本報告書は、農村総合整備事業の事業実施に伴い旧　有明町教育委員会（現　志布志市教育委員会）が実施した発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、旧　有明町役場耕地課の委託を受けて旧　有明町教育委員会が実施した。

3　穴倉遺跡の調査は、本調査を平成９年度に行なった。整理作業・報告書作成は平成 20 年度に行い、鹿児島県教育庁文化財課及び鹿児島県立埋蔵文化財センターに指導・助言を得た。

4　挿図の縮尺は、各図面に示した。

5　発掘調査における写真撮影は中水　忍（旧　有明町教育委員会（当時））が行い、遺構図面の作成は中水　忍・猜ヶ宇都敏江（旧　有明町教育委員会（当時））が行った。

6　発掘作業の実施にあたっては、周辺地権者のご理解と地元作業員のご協力により円滑に行なうことができた。

7　整理作業を川ノ上真理、安野美子、山元弓枝（志布志市教育委員会）で行った。

8　出土遺物の管理・保管は志布志市教育委員会で一括して取り扱い、今後文化財の啓発・普及に活用したい。

凡　　例

1　本報告書に用いたレベル数値は、旧有明町役場耕地課が提示した事業実施計画図面の数値に基づくものである。

2　本報告書の土色・土器の色調について、数字及び英字で表記されているものは、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖　2001 年版」に準じて表記している。

3　遺物番号・各遺構番号は全て通し番号とし、本文及び挿図・図版中の番号と一致する。

4　周辺遺跡一覧に表記してある番号は「周知の埋蔵文化財包蔵地」として登録されている遺跡番号と対応する。

5　遺構の長軸方位は南北方位では北を、東西方位では西を基調にして文章中で表現している。また、文章中にある遺構の方位の解釈は以下のとおりである。

　例）　Ｎ６°Ｅ　→　北から東方向に６°ずれる

6　図面上にある遺物マークについては、下記のとおりに分類した。

　土器　■　　石器　◎　　石　○　　軽石　●

7　図中の方位は一部で磁北を使用している。磁北の場合は「ＭＮ」と標記している。

8　土器観察表中に表記してある胎土の分類については、肉眼観察によるものである。胎土の分類標記は下記の略号を用いている。

　「石・長」→石英・長石　　「雲」→雲母　　「角・輝」→角閃石・輝石

　「礫」→小礫　　「赤」→赤褐色粒　　「砂」→砂粒

　なお、「小礫」については直径２㎜以上の粒状のもの、「砂粒」については直径２㎜未満の粒状のものを指す。

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

有明町耕地課（以下「町耕地課」）は、有明地区において農村総合整備事業を計画したが、同事業区は鹿児島県農政部農地建設課（以下「県農政部」）所管の県営シラス対策事業（東原地区）と重複しており、県農政部が事業区内の埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育庁文化財課（以下「県文化財課」）及び有明町教育委員会（現　志布志市教育委員会　以下「旧町教育委員会」）社会教育課（以下「町社会教育課」）に照会した。

この分布調査の結果をもとに、県農政部、県文化財課、町社会教育課は、埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るための協議を行った結果、事業着手前に埋蔵文化財確認調査（以下「確認調査」）を実施する必要があるという結論に達した。しかし、町耕地課が確認調査実施前に農村総合整備事業に着手したため、緊急に事業区域内に重機による６ヵ所の試掘トレンチを設定し、調査したところ３つの試掘トレンチで遺物包含層が確認されたため緊急に全面調査を実施することとなった。

全面調査は、町耕地課からの受託事業として、旧町教育委員会が調査主体となり県立埋蔵文化財センターの協力を得て、平成10年１月19日から平成10年２月13日まで(17日間)実施した。調査面積は750㎡である。

第２節　調査の組織

〔試掘調査・全面調査〕　平成９年度

調査主体者	有明町教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	大脇茂夫
調査事務局	〃	社会教育課長	高崎成行
	〃	社会教育課課長補佐	
		兼社会教育係長	上村宗市
	〃	社会教育課主事	黒川　晃
調査担当	〃	社会教育課主事	中水　忍
	県立埋蔵文化財センター	文化財主事	堂込秀人

〔報告書作成〕　平成２０年度

調査主体者	志布志市教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	坪田勝秀
調査事務局	〃	生涯学習課長	小辻一海
	〃	文化財管理監	米元史郎
	〃	文化財管理室長	竹田孝志
	〃	埋蔵文化財係長	小村美義
	〃	主任主査	出口順一朗
	〃	主査	大窪祥晃
	〃	主事補	相美伊久雄
	〃	主事補	上集一樹
調査担当者	志布志市教育委員会	主任主査	出口順一朗

第３節　試掘調査の成果

緊急に行われた試掘調査により、３つの試掘トレンチから弥生土器・成川式土器が確認された。出土した中から５点の遺物を実測・図化した。

（１）弥生土器（第１図　１・２）

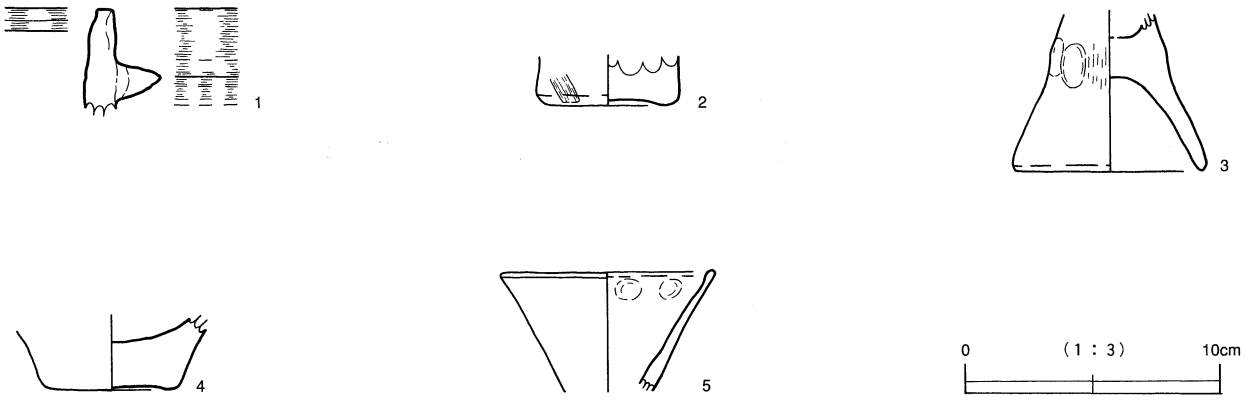
１は大甕の口縁部である。器壁が厚く、口縁部はほぼ直立し、口縁部の下位に突帯を施す。２は甕の底部である。比較的小振りの底部で、底部が僅かに上底を呈する。

（２）成川式土器（第１図　３～５）

３は甕の脚部である。器壁が薄く比較的小型の甕と思われる。脚は作り付けたものであり、直線的に伸び、端部は丸く収まる。４は壷の底部で、平底である。５は高坏の口縁部と思われる。器壁が薄く、口縁部は大きく開いて直行し、調整は粗である。

第１表　穴倉遺跡　試掘調査遺物　土器観察表

挿図番号	番号	注記番号	出土区 出土層（遺構）	器種	部位	分類	胎土						色調 上段：外面 下段：内面		施文・調整 上段：外面 下段：内面	法量（cm）			備考
							石・長	雲	角・輝	礫	赤	砂				口径	底径	器高	
第１図	1	16	2AT Ⅱ層	大甕	口縁部	弥生土器		○		○	○		5YR6/6	橙色	横ナデ・ナデ	－	－	3.0	
													5YR6/6	橙色	横ナデ・ナデ				
第１図	2	－	2T ?	甕	底部	弥生土器		○				○	5YR6/6	橙色	ナデ	－	4.8	1.9	
													－	－	－				
第１図	3	一括	5T Ⅱ層	甕	脚部	成川式土器						○	7.5YR6/4	にぶい橙色	ナデ・指頭圧痕	－	7.2	6.2	外面に黒斑
													7.5YR6/6	橙色	ナデ				
第１図	4	－	10T？ 表採	壷	底部	成川式土器	○	○			○	○	7.5YR6/6	橙色	丁寧なナデ	－	5.0	2.4	
													7.5YR6/4	にぶい橙色	ナデ				
第１図	5	47	2BT Ⅱ層	高坏？	口縁部	成川式土器						○	5YR6/6	橙色	ナデ	8.4	－	4.7	内面に黒斑
													7.5YR6/6	橙色	ナデ・指頭圧痕				



第１図　穴倉遺跡　試掘調査遺物

第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境

第１節　志布志市の概要

志布志市は鹿児島県大隅半島の東部、志布志湾奥のほぼ中央に位置し、東部は宮崎県串間市、西部は大崎町、北部は曽於市と境をなしその一部は宮崎県都城市と接し、総面積は 290 ㎞^{2}であり、大崎町内に 1.02 ㎞^{2}の飛地を有している。

第２節　地形的環境の概要

市周辺の地形は、全体として志布志湾に向かって緩やかな勾配となっており、平野部が極端に少なく、標高 100ｍのあたりから大きく南部の台地と北部の山岳・丘陵地帯に二分される。

南部の台地は安楽川・菱田川・田原川・肝属川などの緒川によって開析される標高約 20～100ｍの火山噴出物の台地（シラス台地）が広がり、「原（ばる）」と表現される比較的平坦な台地が見られる。この台地を南北に貫流する河川に菱田川があり、この沿岸に河岸段丘が形成されている。この河岸段丘は三段階の段丘に大別され、第三段丘面は明治から昭和にかけて先人たちの開墾による野井倉開田・蓬原開田が拓がり、広域に跨る稲作地帯となっている。

北部から東部にかけては標高100ｍのあたりから山岳地帯となり、宮田山（標高520ｍ）をはじめ、霧岳（標高408m），御在所岳（標高530m）などの山岳・丘陵地帯が広がる地域で、中世層を基盤として準平原化の後、周囲の台地が形成されたものといわれ、山地の開析は相当に進み、火山灰台地面を除いてほとんど平坦を残していないため、起伏の多い丘陵が連なっている。そのため山岳・丘陵地帯の集落はこれまで谷間に点在していた。台地上においては地下水位がシラス下部の深い位置にあり、第三段丘面は集落等の形成が困難で開田以前まではほとんど利用されず、シラス下部あるいは降下軽石層を流動する浅層地下水の露頭される段丘面の末端（崖脚）からの自然湧水の有無が集落立地の重要な因子であった。

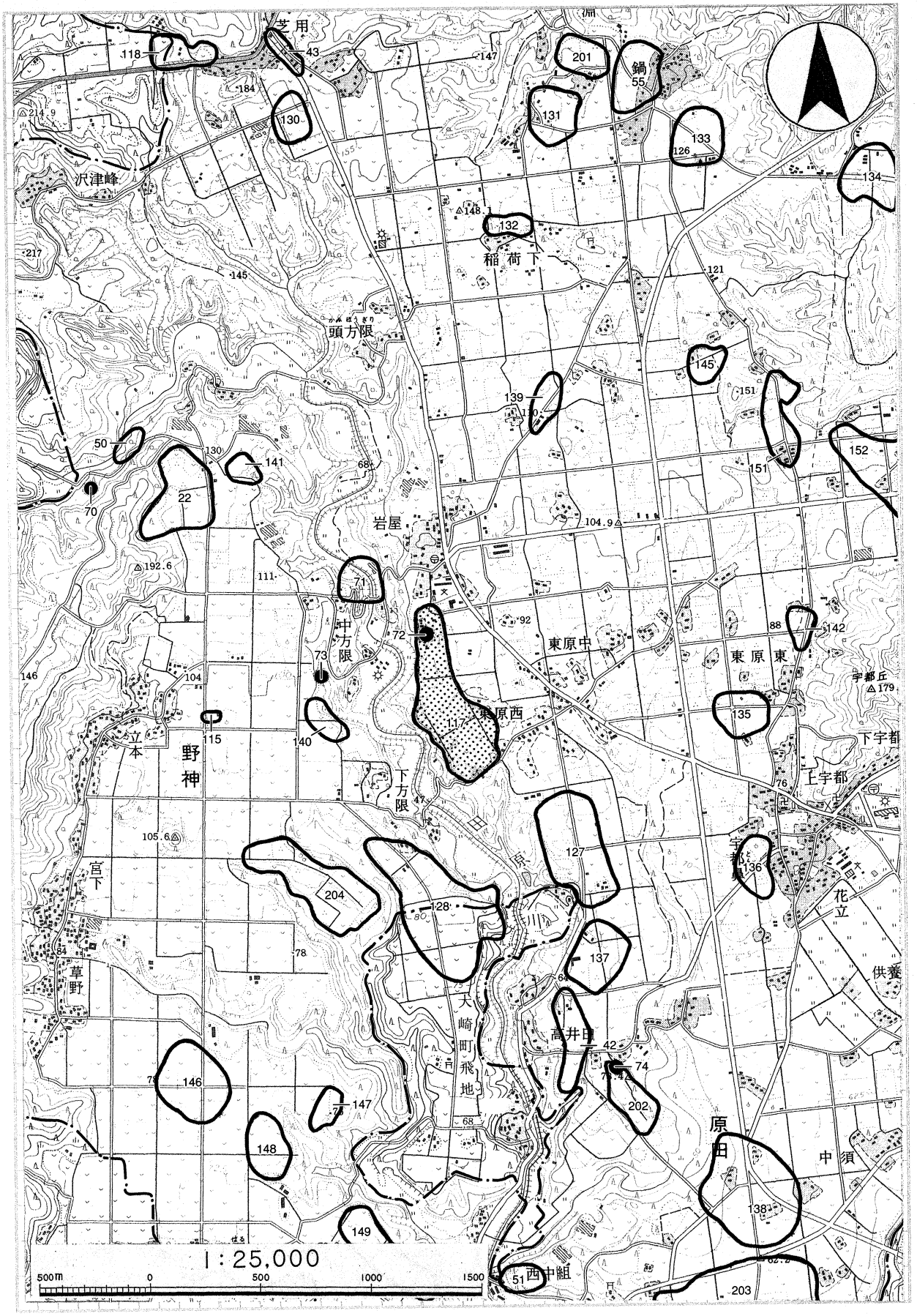
穴倉遺跡は市南部の火山灰台地の田原川沿いの台地上にあり，この台地は菱田川西岸の第三段丘面の一部にあたる通称「野神原（のがんばる）」の西端部（標高約 80ｍ）に立地する。

第３節　遺跡周辺の歴史的環境

穴倉遺跡の周辺には複数の遺跡及び古墳群が存在する。平成 15 年度において同事業・同地区内の調査で石坂式、下剥峯式土器等の縄文時代早期の土器及び２基の集石、池田湖テフラ上面において９基の掘立柱建物が確認されている。穴倉遺跡が立地する台地の下を流れる田原川沿岸には、小規模ながら古墳群が複数存在し、岩屋古墳群〔71〕、中方限古墳群〔72〕、渡迫古墳群〔73〕等が確認されている。

【参考文献】

出口順一朗・東　徹志・中水　忍・中村直子・内山伸明　2008　『上苑Ａ遺跡・穴倉Ｂ遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（１）　志布志市教育委員会
有明町郷土史編纂委員会　1980　『有明町誌』　有明町教育委員会



第２図　穴倉遺跡　周辺遺跡位置図

第２表　穴倉遺跡周辺遺跡一覧

番号	遺　跡　名	所　　在　　地	地形	時　代	遺物・遺構等	備　　考
22	牧原Ａ	野神字牧原・高尾・中牧	台地	縄(後)	磨製石斧・打製石斧	
42	塚堀	原田字塚堀・下原	台地	縄・歴	土師器	
43	釣段	山重字釣段・中迫・水道	台地	弥(前)	土器・石器	
50	古池	野神字古池・高尾	台地	弥(中)	石斧（磨製・打製）	
51	清水	原田字清水	台地	弥(中)	打製石斧・磨製石斧	旧遺跡名　元宮の下・永田
55	田渕Ｂ	野神字田渕・大久保	台地	弥	打製石器	
70	山神ノ上古墳	野神字後平	台地	古	円墳	
71	岩屋古墳群	野神字河内・井手元	台地	古	円墳３基	
72	中方限古墳群	野神字穴倉	台地	古	円墳	
73	渡迫古墳群	野神字岩道	台地	古	円墳	
74	高井田古墳群	原田字下原	台地	古	円墳１基・方墳１基	
115	長塚古墳	野神字岩道・立下	台地	古	円墳	
117	**穴倉**	**野神字穴倉**	**台地**	**縄(早) 弥・古**	**石坂式・下剥峯式・ 成川式**	**平成６年度農政分布調査 平成12年度確認調査 平成９・15年度全面調査 志布志市埋蔵文化財 発掘調査報告書（１）**
118	北別府	野神字芝用・小迫	台地	縄		平成７年度農政分布調査
127	下堀	野神字下堀・立山	台地	縄(早) 弥・古	前平式・吉田式・倉園Ｂ式・石坂式・下剥峯式・桑ノ丸式・手向山式・押型文・塞ノ神式・右京西式・成川式・集石・連穴土坑	平成８年度農政分布調査 平成11・19年度確認調査 平成14年度全面調査 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
128	浜場	野神字浜場	台地	縄(早) 古	前平式・辻タイプ・加栗山式・石坂式・手向山式・塞ノ神式・苦浜式・石鏃・成川式・竪穴状遺構・連穴土坑	平成８年度農政分布調査 平成11・19年度確認調査 平成14・19年度全面調査 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（３）
130	水道	野神字水道・水道	台地	古		平成11年度農政分布調査
131	釣ヶ段	山重字釣ヶ迫 野神字田渕・大久保	台地	古		平成10年度農政分布調査
132	森土	野神字森土	台地	縄・古		平成11年度農政分布調査
133	鍋迫	野神字鍋迫・鍋前	台地	古		平成10年度農政分布調査
134	井ノ木	山重字上ノ段・竹迫	台地	古		平成11年度農政分布調査
135	大堀	野神字大堀・水喰	台地	古･古代		平成10年度農政分布調査
136	上原	原田字上原	台地	古		平成10年度農政分布調査
137	立山	原田字立山	台地	古		平成10年度農政分布調査
138	東中原	原田字東中原・大塚	台地	古		平成10年度農政分布調査
139	廣迫	野神字廣迫・中岡	台地	古		平成10年度農政分布調査
140	渡迫	野神字渡迫・岩道・薗田	台地	古代	土師器	平成11年度農政分布調査
141	牧原B	野神字牧原	台地	古		平成10年度農政分布調査
142	水喰	野神字水喰 蓬原字山ノ後	台地	古代		平成10年度農政分布調査
145	丸岡Ａ	野神字丸岡・中ノ丸	台地	古		平成10年度農政分布調査
146	風穴	野神字風穴・五色	台地	古		平成10年度農政分布調査
147	上五敷	原田字上五敷・五色	台地	古		平成10年度農政分布調査
148	五色	野神字五色・風穴	台地	古		平成10年度農政分布調査
149	西ノ堀	原田字西ノ堀・下五敷	台地	古		平成10年度農政分布調査
151	丸岡Ｂ	野神字丸岡 蓬原字楠原・山ノ後	台地	古		平成10年度農政分布調査
152	楠原Ｂ	蓬原字楠原・山ノ後・屋部当	台地	古		平成10年度農政分布調査
201	大久保	野神字大久保・釣ヶ段	台地	弥	打製石斧	
202	下原	原田字下原	台地	古		平成10年度農政分布調査
203	大塚	原田字大塚・出口	台地	縄・古		平成８年度農政分布調査
204	浜場Ａ	野神字浜場	台地	古代		平成15年度農政分布調査

第Ⅲ章　全面調査の概要

第１節　全面調査の方法

調査対象区を任意のＡ～Ｃの３つのブロックに分割し、Ⅰ・Ⅱ層を重機により除去した後、ブロック毎に人力による掘り下げ作業を実施した。本事業地区は、基盤整備等がされており畑部分の上層は撹乱されていたが、遺物包含層の残存状況は良好な状態であった。

調査対象区は延長距離約 100m，幅約４ｍの未舗装農道であり、調査区内の任意の起点から方位に応じた10m×10mのグリッドを設定し、東から西へ１～４区、北から南にＡ～Ｋ区の記号・番号を付し、「Ａ－１区」「Ｂ－１区」…と呼称した。（第３図）

調査は、調査対象区北側のＡブロックから調査を開始した。

第２節　層位

標準土層は、下記のとおりである。

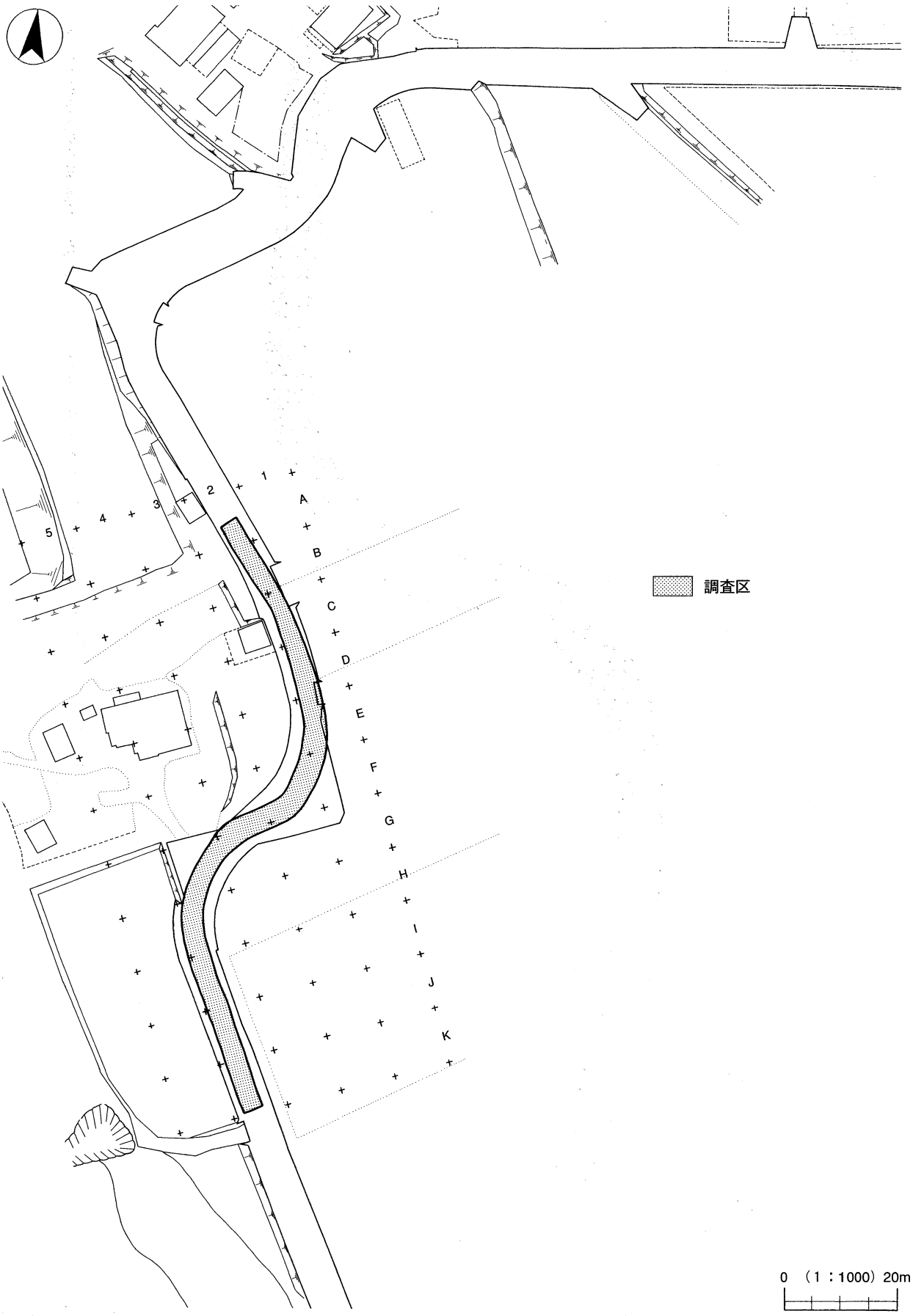
Ⅰ層	灰褐色土	表土。旧道の硬化面あり。
Ⅱ層	黒色腐植土層	やや粘質のある腐植土層で、平安・古墳・弥生時代の時期に相当する遺物包含層である。
Ⅲ層	黄褐色土層	3,300 年前の開聞岳噴出物と思われるオレンジ色のパミスを多く含む遺物包含層である。
Ⅳ層	黒褐色土層	やや硬質の土層である。
Ⅴ層	黄橙色火山灰層	5,500 年前の池田カルデラ降下軽石と思われるテフラがブロック状に点在している。
Ⅵ層	黒色土層	6,300 年前に鬼界カルデラから噴出されたとされるアカホヤ火山灰で、全体にブロック状に存在している。

第３節　全面調査の概要

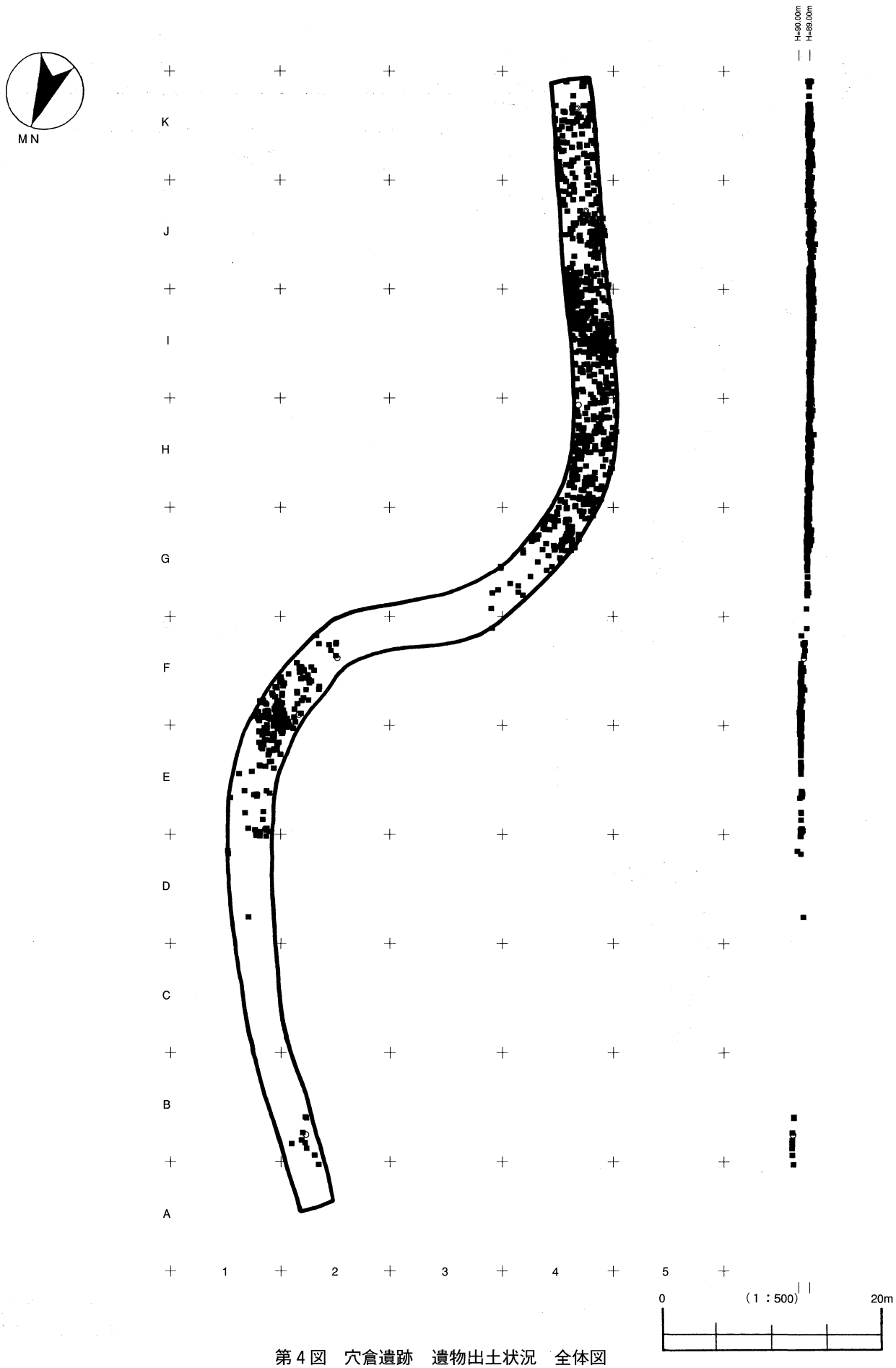
調査は、第Ⅰ章で前述したが町耕地課が調査前に工事着手したため、工事を差し止めて行われた緊急の試掘調査により、包含層が確認された範囲で行った。短期間の全面調査を余儀なくされ調査の精度が図れなかったのは否めなかった。

そのような状態の中で、遺構はⅢ層上面よりＥ－１・２区より掘立柱建物１基、Ｅ－１区より掘立柱建物の柱穴配列内に土坑１基、Ｅ－１区、Ｈ～Ｋ－４区の範囲内から不規則な配置で検出された柱穴 17 基が検出された。

遺物は主にⅡ層で出土した。遺物の分布は、Ａ・Ｂ－２区、Ｄ・Ｅ・Ｆ－１区、Ｅ・Ｆ－２区、Ｆ・Ｇ－３区、Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ－４区、Ｈ・Ｉ－５区に広がり、調査対象区の南側に主に分布の傾向が見られた。（第４図）



第３図　穴倉遺跡　グリッド設定図



第４図　穴倉遺跡　遺物出土状況　全体図

第４節　発掘調査の成果

１　弥生時代・古墳時代の調査

遺物は弥生時代・古墳時代の遺物包含層であるⅡ層から、主として弥生土器が中心に出土した。遺物の出土分布はＡ・Ｂ－２区、Ｄ～Ｆ－１区、Ｅ・Ｆ－２区、Ｆ・Ｇ－３区、Ｇ～Ｊ－４区、Ｈ・Ｉ－５区に広がり、調査対象区の南側に主に分布の傾向が見られた。（第８図）

遺構検出はⅢ・Ⅵ層上面で行った。検出の結果、Ⅲ層上面よりＥ－１・２区より掘立柱建物１基、Ｅ－１区より掘立柱建物の柱穴配列内に土坑１基と柱穴状遺構１基、Ｈ～Ｋ－４区に柱穴17基が検出された。

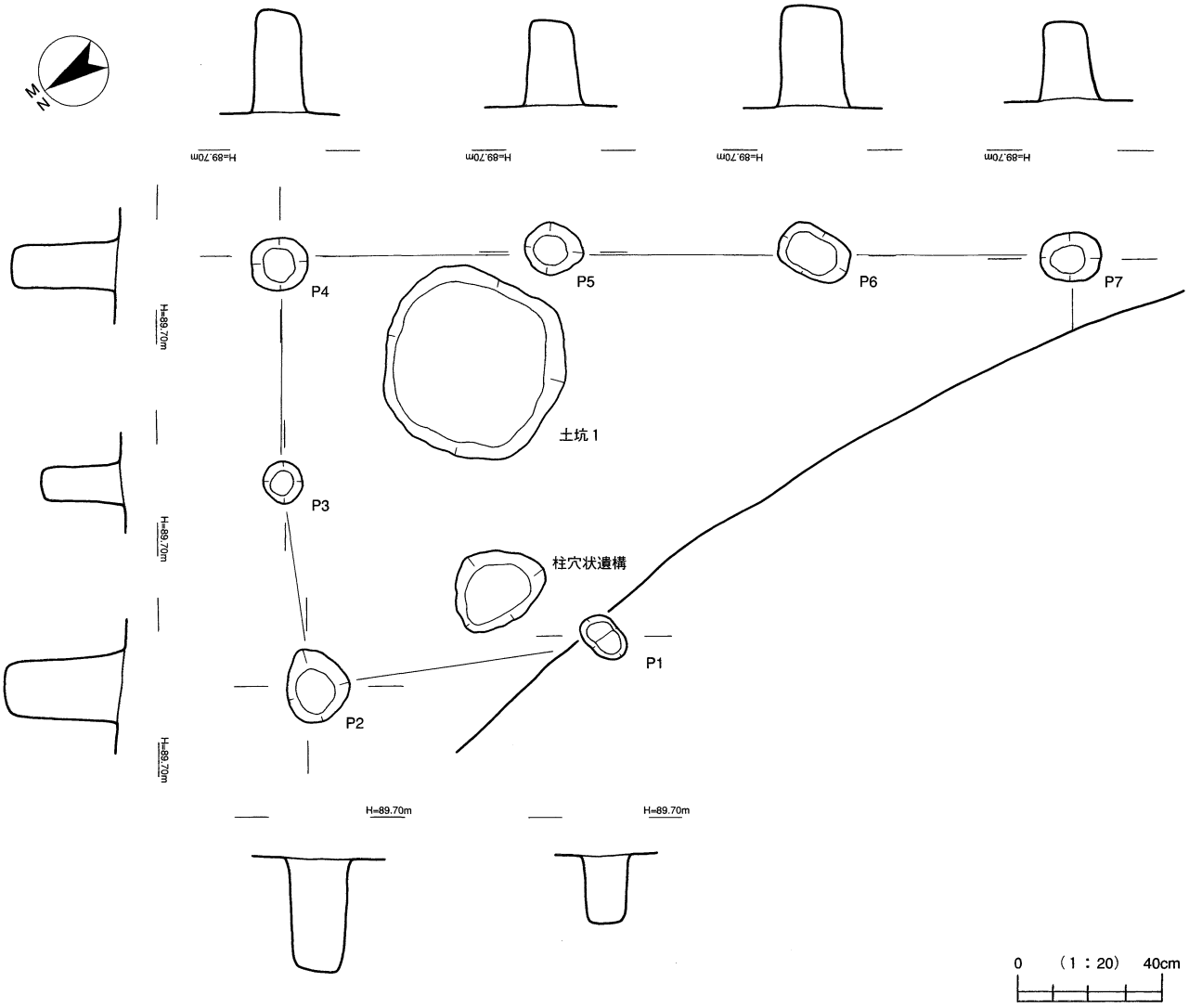
なお、Ⅵ層上面から遺構は検出されなかった。

（１）遺構

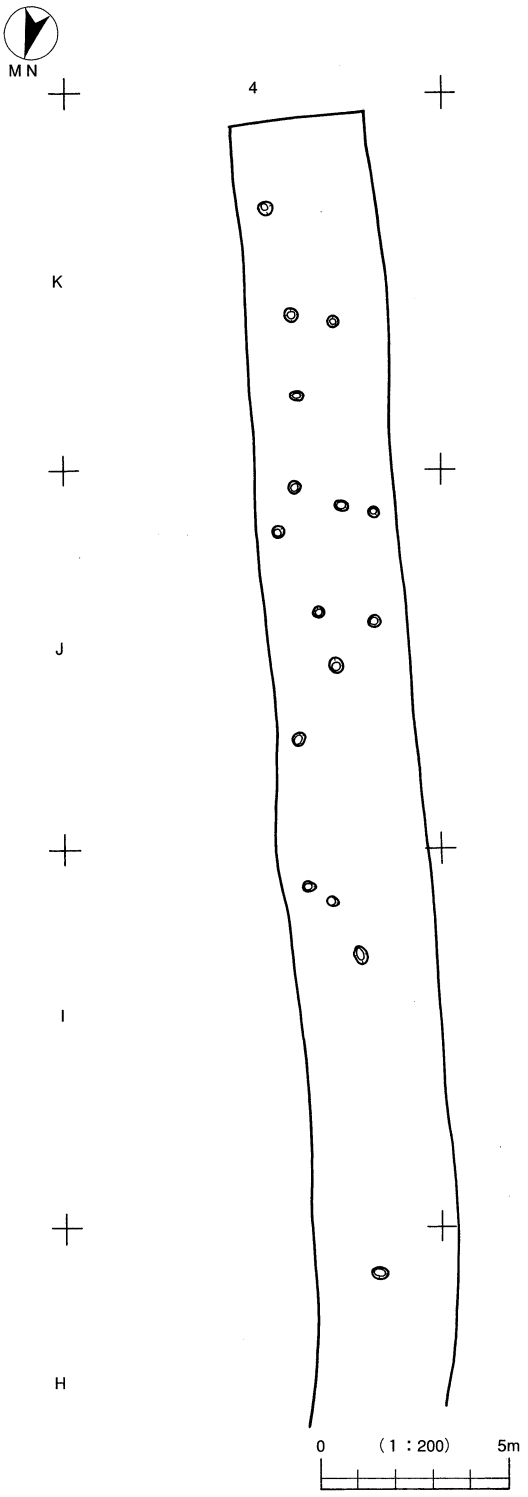
ア　掘立柱建物

①掘立柱建物１（第５図）

掘立柱建物１はⅢ層上面よりＥ－１・２区で検出された。長軸方向はN25°Ｅの北北



第５図　穴倉遺跡　掘立柱建物１　平面・断面図



第６図　穴倉遺跡　Ⅲ層上面検出　遺構配置図
（Ｈ～Ｋ－４・５区）

東方向に延びる。遺構の南西側が事業対象区域外に延びており、遺構全体の形状は断定が出来ないが、残存する柱穴の配置から遺構の平面形は桁行２間×梁行３間の若干歪みのある長方形を呈すると思われる。遺構の検出された柱穴と柱穴の間隔は比較的狭く、また柱穴の形状に若干の差異はあるが、柱穴の径・深さはほぼ均一である。

なお、検出された柱穴埋土から弥生土器の高坏の口縁部（87）の一部が出土した。このことから掘立柱建物１は弥生時代以降に存在したと思われ、弥生時代の遺構として分類した。

また、掘立柱建物１の柱穴配列内にそれぞれ１基の土坑（以下「土坑１」と呼称）と柱穴状遺構が検出された。柱穴状遺構は平面の形状が若干歪な楕円形であり、直径約 30 ㎝、深さは 40 ㎝を測り、土坑１の計測値は第４表の通りである。土坑の平面形は隅丸方形に近い楕円形であり、検出面から床面までの最深部で 32 ㎝を測る。土坑の特徴として、検出面からほぼ垂直に近い掘り込みであり、底面は平坦に近い形状を持つ。土坑内より遺物は確認できなかった。

これらの掘立柱建物１・土坑１・柱穴状遺構は、掘立柱建物１周辺の同検出面から他の遺構が確認することができず、土坑１と掘立柱建物１の長軸方向の差異はあるものの、両遺構がごく近い位置関係で検出されたことから、ほぼ同時期に３つの遺構は存在したものと考えられる。

イ　柱穴

柱穴はＨ～Ｋ－４区に柱穴 17 基が検出された。（第６図）それぞれ検出された柱穴は掘立柱建物１の柱穴と比較して若干小さく、遺構配置についても法則性が見られなかった。柱穴の分布は調査区の南側に向かって遺構密度が濃くなる傾向があり、また調査区の東西にも広がり、掘立柱建物等の遺構の配列が確認される可能性が十分考えられる。

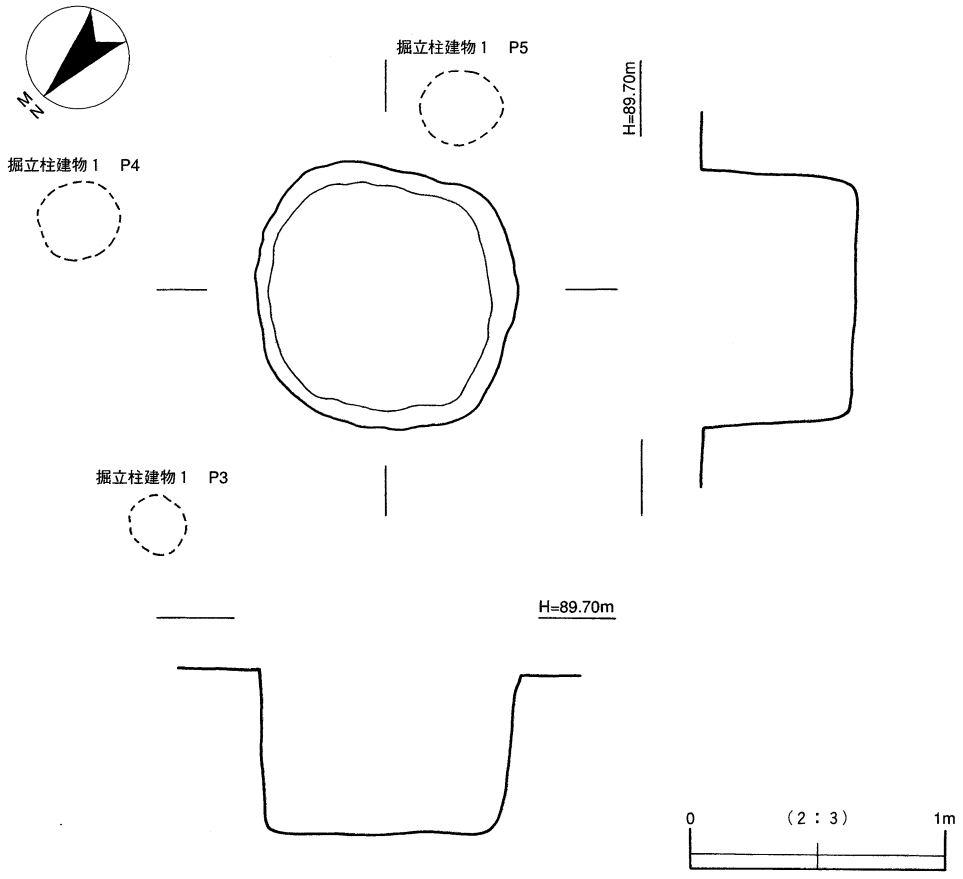
第３表　浜場遺跡　掘立柱建物１　計測表　（単位：cm）

挿図番号	第５図	検出区	Ｅ－１・２区	検出層	Ⅲ層上面	方　位	N25°　E	床面積（㎡）	—

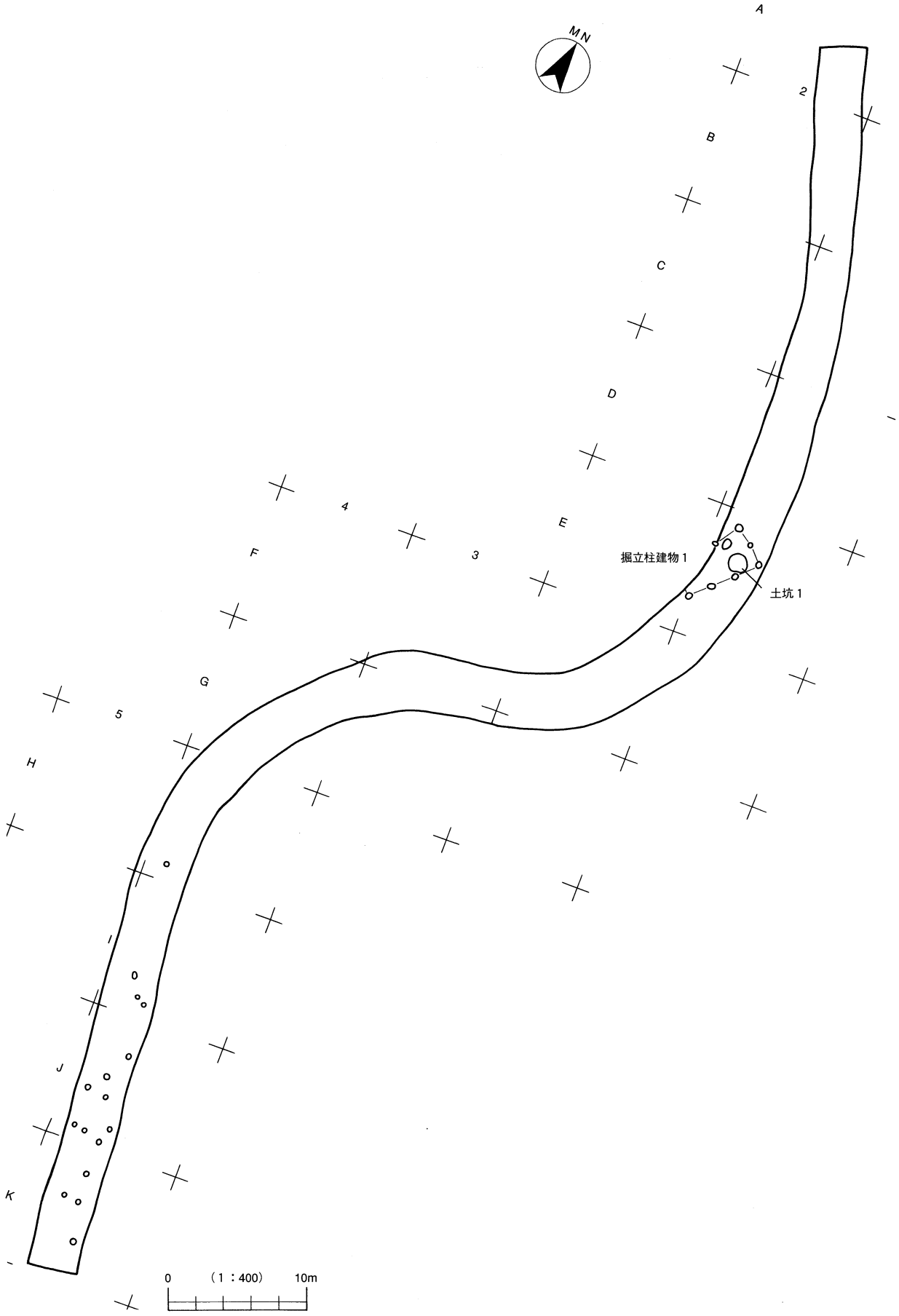
梁行１間	梁間柱間	梁行間	梁桁１間	梁桁柱間	梁桁間	柱穴番号	長径	短径	深さ	柱穴平面形
Ｐ2－Ｐ3	58.0	121.0	Ｐ1－Ｐ2	84.0	307.0	Ｐ1	14.0	9.0	19.0	楕円形
Ｐ3－Ｐ4	63.0		Ｐ4－Ｐ5	78.0		Ｐ2	21.0	18.0	32.0	楕円形
			Ｐ5－Ｐ6	73.0		Ｐ3	12.0	11.0	22.0	円形
			Ｐ6－Ｐ7	72.0		Ｐ4	16.0	15.0	29.0	円形
						Ｐ5	17.0	15.0	24.0	楕円形
						Ｐ6	20.0	19.0	28.0	楕円形
						Ｐ7	16.0	14.0	22.0	楕円形
平均	61.0	—	平均	77.0	—	平均	17.0	14.0	25.0	—

第４表　穴倉遺跡　掘立柱建物１内検出　土坑１　計測表　（単位：cm）

土坑番号	挿図番号	検出区	検出層	長径	短径	深さ	平面形	備考
土坑１	第７図	Ｅ－１区	Ⅲ層上面	57.5	53.5	32.0	楕円形	



第７図　穴倉遺跡　土坑１　平面・断面図



第８図　穴倉遺跡　Ⅲ層上面検出　遺構配置図

2　出土遺物

土器

土器は主に弥生土器・成川式土器がⅡ層より出土した。総点数はⅡ層より 1215 点を数え、その他Ⅲ層より 10 点（A・B－2区、D－1区）、Ⅳ層より2点（D－1区）出土し、Ⅲ・Ⅳ層出土遺物はⅡ層の落ち込みが考えられる。Ⅱ層出土土器の分布はD－1区、E－1・2区、F－1・2区、F・G－3区、G－4区、H・I－4・5区、J・K－4区で確認され、特にI－4区に土器の分布が密である。（第 16・17・18 図）

（1）弥生土器

本遺跡から多数の弥生土器が出土している。それらの遺物は遺物包含層であるⅡ層から出土し、甕・壷・鉢・高坏・大甕・小型土器に分類され、特に甕・壷類を中心とした土器が大部分を占めている。これらの器種毎にさらに細かい分類基準を設けた。

1　甕

甕は口縁部の形態により1～7類に、底部の形態により1～3類に分類した。分類概念については下記のとおりである。

甕　口縁部

①甕1類（第9図　6～8）

甕1類は「肥厚した逆L字状口縁。口唇部は丸みをもち、口縁部内側が強く張り出しの尖りが大きく、上面に凹みをもつもの。」と分類概念を定義した。6～8は口縁部が残存し、口縁部上面に浅い凹みが見られ、口唇端部は平坦に近い。6は張り出しの尖りは滑らかに調整される。7・8は口縁部内側の張り出し面の調整が粗い。7・8は同一個体と思われる。

②甕2類（第9図　9）

甕2類は「器壁の薄い「く」の字状口縁。口縁部内部の張り出しは尖り、上位面に直線的に延びる平面をもつもの。口縁部断面は口唇部へ向かって先細りしており、長めの三角形を呈する。」と分類概念を定義した。9は口縁部が残存する。口縁部内部の張り出しが尖り、面の調整は粗い。口唇部が浅く凹む。

③甕3類（第9図　10～14）

甕3類は「口縁部内側の張り出しは小さくなるが、意識して張り出しを作り「く」の字状の口縁を呈するもの。先細り気味の口縁部はやや長めで断面は三角形に近い。胴部上位面は直線的に延びる。」と分類概念を定義した。10～14 は口縁部が残存する。10 は口縁部上面端部に浅い凹みを、口唇部に凹みをもつ。11 は口唇部に凹みをもつ。12 は器壁が薄く比較的小型の甕である。口唇部に浅い凹みをもつ。13・14 は口縁部内部の張り出しは尖りがなく、平坦にナデ調整されている。口唇部の凹みがやや深い。

④甕4類（第9図　15・16）

甕4類は「形態的には甕2類と同じだが、口縁部内部の張り出しが小さく、上面に平坦面が直線的に伸びるもの。口縁部断面は丸みをもった方形に近い。」と分類概念を定

義した。15・16 は口縁部から胴部が残存する。15 は口縁部内面の張り出しに大小あるが、比較的小さくおさまる。口唇部に浅い凹みをもつ。16 は口縁部がやや反り気味であり、胴部に３条の三角突帯が廻る。口唇部に浅い凹みをもつ。

⑤甕５類（第９図　17）

甕５類は「立ち上がりの弱い口縁部が外反し、口縁部内側にわずかな張り出しか強い稜をもつ「く」の字状口縁。胴部は張り出しをもつもの。」と分類概念を定義した。17 は口縁部が残存し、比較的小型の甕と思われる。

⑥甕６類（第９・10 図　18～31）

甕６類は「口縁部が強く外反する「く」の字状口縁を呈し、内側に稜を持つが張り出しは見られないもの。口縁部上面はわずかに反っている。胴部はあまり張りをもたず口縁に最大径を持つものが多い。」と分類概念を定義した。18・19 は口縁部から胴部が残存する。18 は口唇部が平坦で、胴部に３条の三角突帯が廻る。19 は口唇部にわずかに凹みがあり、胴部に２条の三角突帯が廻る。胴部は底部に向かって緩やかに窄まる。20・21 は口縁部が残存する。20 は口唇部にわずかに凹みがあり、胴部に２条の三角突帯が残存する。21 は稜があまり明確ではないが、口縁部の傾きが「く」の字状口縁を呈することから甕６類とした。口唇部は平坦である。22 から 24 は口縁部から胴部が残存し、胴部は緩やかな張りをもつ。22 は口唇部に明瞭な凹みをもち、胴部の器壁は比較的薄い。23 は器壁も薄く、比較的小型の甕と思われる。口唇部に凹みをもつ。24 は口唇部が欠損し、胴部に３条の三角突帯が廻る。25 から 28 は口縁部が残存する。口唇部にわずかに凹みをもつ。29 から 31 は胴部であり３条の三角突帯が残存する。29 は突帯と突帯の間が他の遺物と比べて広いことから大甕の可能性もある。三角突帯の裾部が広がる。31 は三角突帯の盛り上りが比較的小さい。

⑦甕７類（第 10・11 図　32～34）

甕７類は「口縁部の傾きが弱くわずかに外反するが直立気味に広がるもの。内側に張り出しや稜をもたず、口唇部は丸みをもち、尖るものと面を持つものがある。胴部上位に張りをもち脚台に向かって窄まる。」と分類概念を定義した。32 から 34 は口縁部から胴部が残存する。32 は口唇部が平坦で、胴部に２条の三角突帯が廻る。33・34 は口唇部が平坦である。34 は器壁が薄く、比較的小型の甕と思われる。

甕　底部

①甕(底) １類（第 11 図　35）

甕(底) １類は「大きな平底で安定しており、端部がやや張り出しをもつもの。」と分類概念を定義した。35 は底部が残存する。端部にやや張り出しをもち、裾の端面近くに粗いナデ調整で歪な窪みをもつ。

②甕(底) ２類（第 11 図　36・37）

甕(底) ２類は「わずかな上底の脚台で脚の開きは小さく設置面が広いもの。胴部は直

線的に延びる。」と分類概念を定義した。36・37は胴部から底部が残存する。36は裾の端面に丸みを帯びている。37は裾の端面は凹んで、凹面状を呈する。

③甕(底)３類（第11図　38）

甕(底)３類は「裾部が穏やかに開く脚台であり、脚台内面天井が凹むもの。」と分類概念を定義した。38は底部が残存し、裾の端面が丸みを帯びる。

２　壷

壷は口縁部の形態により１～７類に、底部の形態により１～４類に分類した。分類概念については下記のとおりである。

壷　口縁部

①壷１類（第11図　39～41）

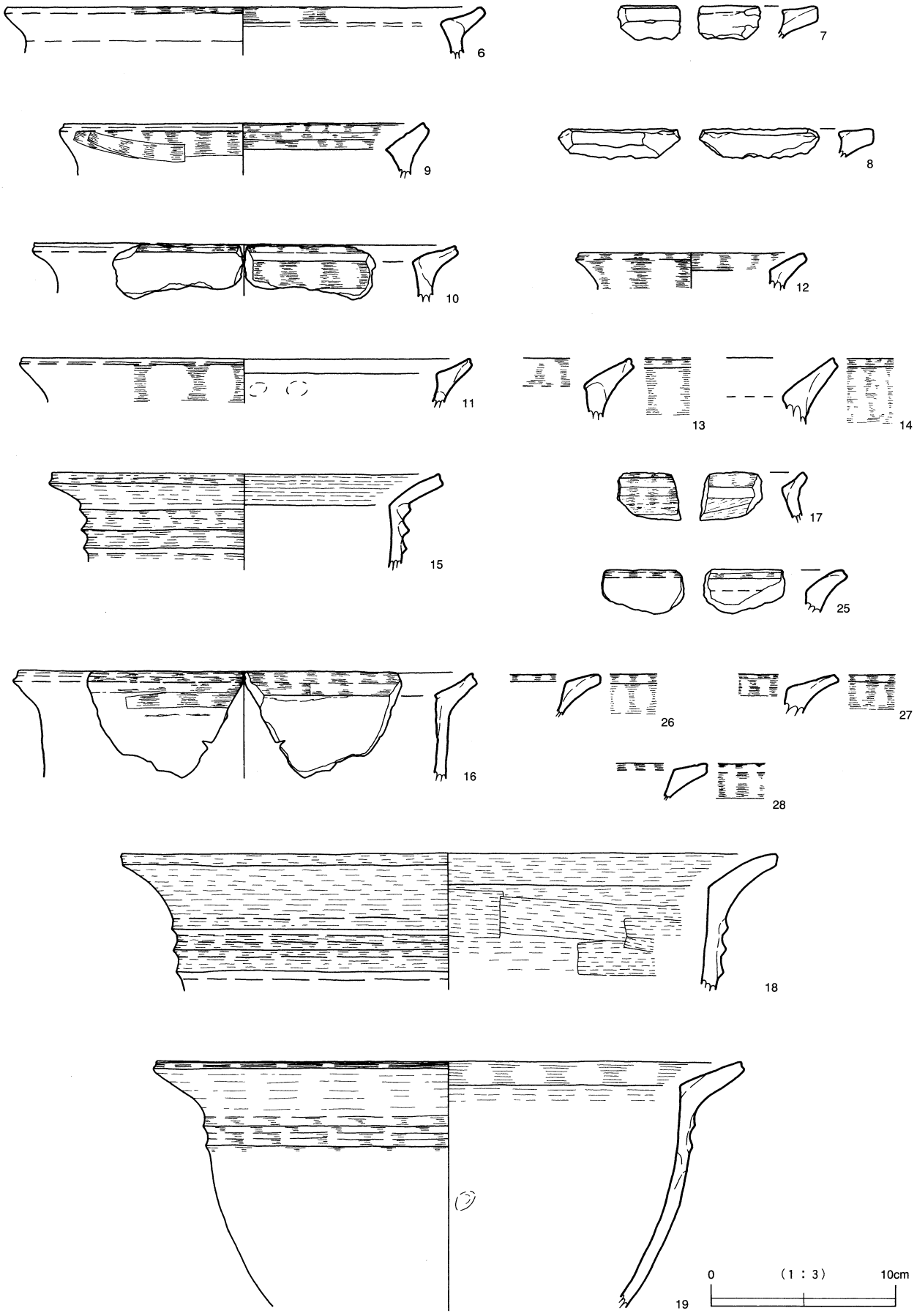
壷１類は「ラッパ状に外反する口縁部端部外面に突帯を施す。二又状口縁を呈するもの。」と分類概念を定義した。39・40は口縁部から胴部が残存し、39は口唇部がわずかに凹み、口縁部端部外面に三角突帯を廻らす。40は口唇部が凹み、口縁部端部外面に三角突帯を廻り、突帯端面は凹む。41は小型の甕の可能性もあったが口縁部から突帯の位置が近いため、この類に分類した。口縁部内面に稜をもつ。

②壷２類（第11・12図　42～50）

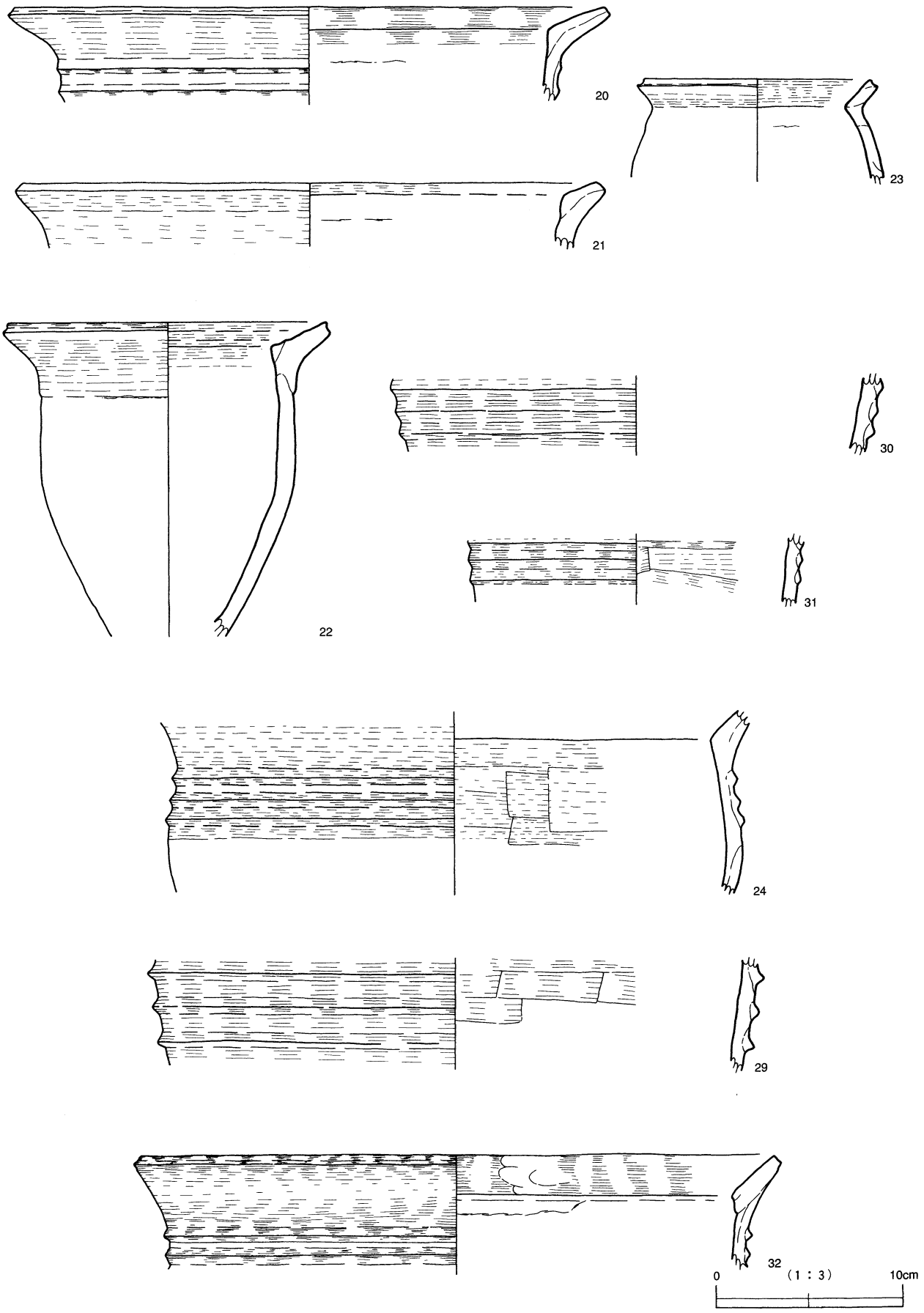
壷２類は「口縁部が大きく外反し、内側に明瞭な稜をもち、口唇部に広めの平坦面があり口唇部端部に丸みを帯びるもの。口唇部の平坦面に沈線をもつものもある。」と分類概念を定義した。42・43 は口縁部から頸部が残存する。42 は口唇部に工具による３条を基本とした小波状の沈線文が施文される。外面にナデ磨き調整が認められ、50と同一個体と思われる。43は口唇部の平坦面に浅い凹みがある。44と同一個体と思われる。44から49は口縁部が残存する。44は口唇部の平坦面に浅い凹みがある。43と同一個体と思われる。45は口唇部に明瞭な凹みがあり、口縁部端部外面に三角突帯を貼付けている。46は口唇部に広めの平坦面があり、口縁部端部外面の張り出しが顕著で、断面から視認できなかったが、口縁部端部外面に三角突帯を貼付したものと思われる。47 は 46と同様の形状であるが、さらに強い張り出しがあり、口縁部端部外面に三角突帯の貼付が視認できる。48・49 も 46 と同様に口唇部に広めの平坦面があり、口縁部端部外面の張り出しが顕著である。48は口唇部に工具による３条を基本とした小波状の沈線文が施文される。49 は工具による３条を基本とした幾何学状の沈線文が施文される。50 は頸部から胴部が残存し、外面をヘラ磨き調整が認められ、大きい張り出しをもつ。42と同一個体と思われる。

③壷３類（第11・12図　51～53）

壷３類は「締まった頸部からやや立ち上がり気味に開き、上位で強く外反する広口壷の口縁部をもつもの。口唇部に面をもち中央がやや浅く凹む。」と分類概念を定義した。



第９図　穴倉遺跡　弥生土器　1



第10図　穴倉遺跡　弥生土器　2

51 は口縁部が残存する。51 は頸部内側に稜をもち、口唇部の面は平坦に近い。52・53 は口縁部から胴部が残存する。52・53 は 51 と異なり頸部に稜が見当たらず、口唇部に浅い凹みをもつ。52 は胴部の張り出しがあり、口縁部を上回る径をもつが、53 は張り出しが弱く、底部に向かって窄まると思われ、短頸壷の可能性がある。

④壷４類（第 12 図　54～64）

壷４類は「胴部は膨らみをもち、口縁部の屈曲が弱く緩やかに外反するもの。」と分類概念を定義した。54 は口縁部から頸部が残存し、口唇部が平坦である。55・56 は口縁部が残存する。55 は壷３類に類する可能性があるが、口縁部の屈曲が緩やかに外反することから第４類に分類した。口唇部は平坦で、口縁部直下にも面取り的に平坦面をもつ。頸部に焼成前に穿かれたと思われる直径５㎜程度の孔が２箇所ある。56 は口唇部にわずかに凹みがあり、口縁部端部外面に横ナデ調整の際に施されたと思われる段がある。57 は頸部が残存し、頸部にごく近い胴部上位に２条の三角突帯が残存する。58 から 64 は胴部が残存する。58 は胴部上位に頸部内面の屈曲が見られ、57 と同様頸部にごく近い胴部上位に３条の三角突帯が廻る。器壁は比較的薄い。59 は胴部に４条の三角突帯が残存する。この遺物の胎土は他の遺物と異なって乳白色を呈しているため、搬入品の可能性がある。60・61 は胴部に２条の三角突帯が残存する。61 は比較的器壁が薄い。62 は胴部内面上位に緩やかな屈曲が見られる。63 は胴部に３条の三角突帯が残存し、胴部上位外面に三角突帯の裾と思われる部位が見られる。64 は２条の三角突帯が残存する。

⑤壷５類（第 12 図　65）

壷５類は「張りのある胴部をもつもの。」と分類概念を定義した。65 は頸部から胴部が残存し、頸部に１条の三角突帯が残存する。

⑥壷６類（第 13 図　66・67）

壷６類は「胴部が大きく張り出し、胴部中位が「く」の字状に屈曲し稜をもち、胴部の形状が算盤玉状のもの。」と分類概念を定義した。66・67 は胴部が残存し、稜の上位はハケ目調整が施される。66・67 は同一個体と思われる。

⑦壷７類（第 13 図　68）

壷７類は「全体器形は不明であるが、突帯や文様等に特徴のあるもの。」と分類概念を定義した。68 は胴部と思われ、１条の三角突帯が残存し、その下位に低い円柱状の突起が貼り付けられている。

壷　底部

①壷（底）１類（第 13 図　69・70）

壷（底）１類は「円盤状の平底をもつもので、比較的底径が小さいもの。胴部は接地面からわずかに直立した後、大きく開き直線状に伸びる。」と分類概念を定義した。69・70 は胴部から底部が残存する。69 は器壁が厚く、胴部がわずかに内湾する。70 は比較的器壁が薄く、69 よりもさらに胴部が開いて伸びる。

②壷（底）２類（第13図　71・72）

壷（底）２類は「底面の張り出しが見られず広い平坦面を持つ平底で、直接胴部が開くもの。」と分類概念を定義した。71・72は胴部から底部が残存する。71は底面に打痕が見られ、何らかの理由で打ち掻いた可能性がある。72は接地面からの立ち上がりが丸みを帯びる。

③壷（底）３類（第13図　73～78）

壷（底）３類は「底面から緩やかに立ち上がるもので、第２類よりも底径が小さいもの。」と分類概念を定義した。73から79は胴部から底部が残存する。73は器壁が底部・胴部とも薄く、胴部はかなり開いて伸びる。74は73と同様に胴部がかなり開いて伸びると思われるが、底部の器壁は厚い。75は胴部が緩やかに立ち上がり、直線状に伸びる。76は胴部が内湾しながら立ち上がる。底径は胴部の張りに対して小さめである。77は接地面の立ち上がりが丸みを帯び、胴部の立ち上がりは直線状に伸び、比較的小型の壷の可能性がある。78は底径が２㎝と極めて小さい。また底部は器壁が厚く、胴部がかなり開いて伸びると思われ、甕の可能性も考えられる。

④壷（底）４類（第13図　79）

壷（底）４類「底面に明瞭な平坦面を持たない、丸底気味の底部であるもの。」と分類概念を定義した。79は底面が１㎝程度で、その底面も明瞭な平坦面は見当たらず、底面に凹みが見られる。器壁が薄く、胴部も強い張り出しをもち、比較的器高の低い壷と思われる。

３　鉢

鉢は口縁部の形態により１～３類に分類した。分類概念については下記のとおりである。

鉢　口縁部

①鉢１類（第13・14図　80～82）

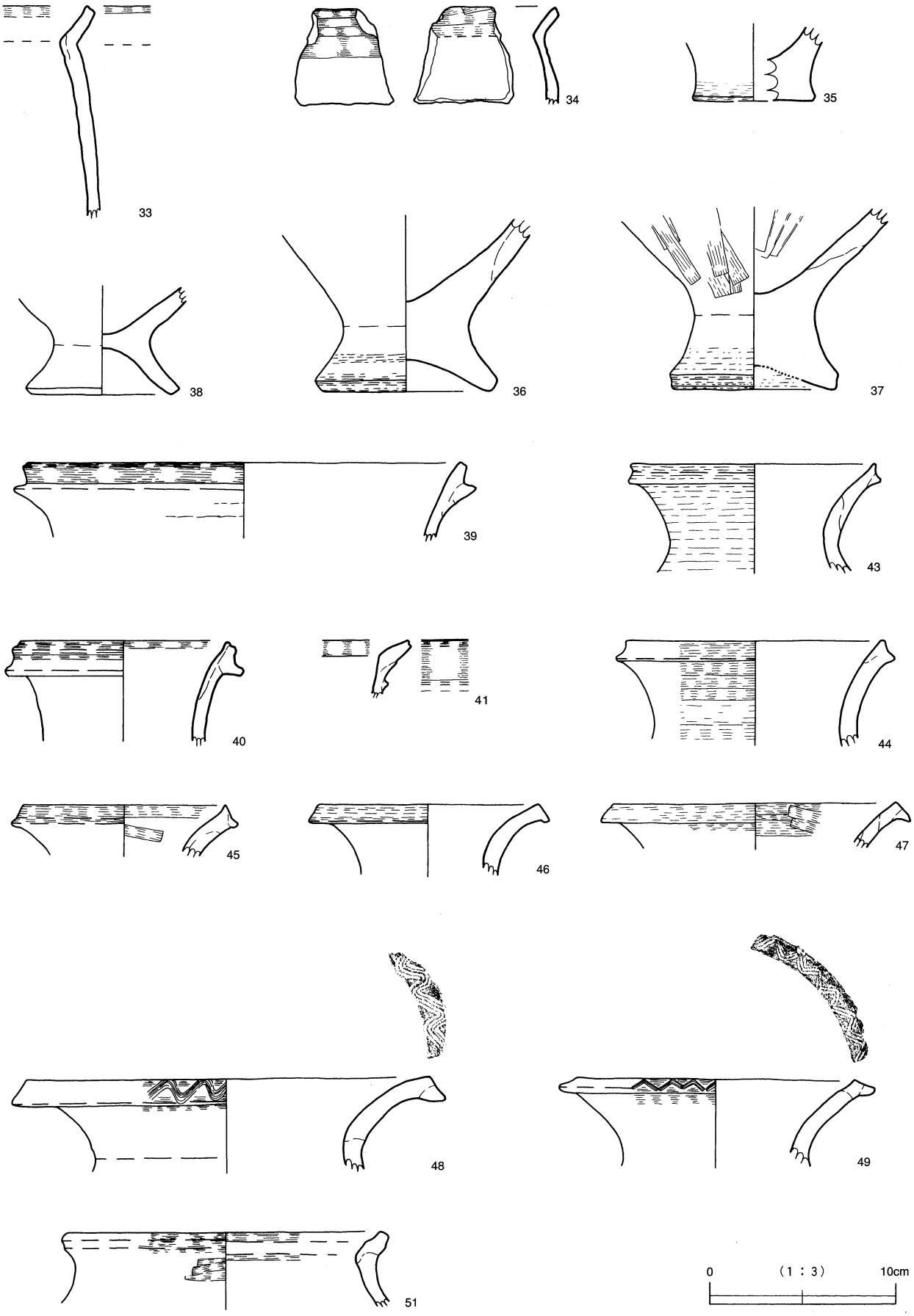
鉢１類は「口縁部が緩やかに外反する「く」の字状の口縁部で、内側に稜をもつもの。80から82は口縁部が残存する。」と分類概念を定義した。80は口唇部が平坦で、81・82は口唇部に浅い凹みをもつ。

②鉢２類（第13図　83）

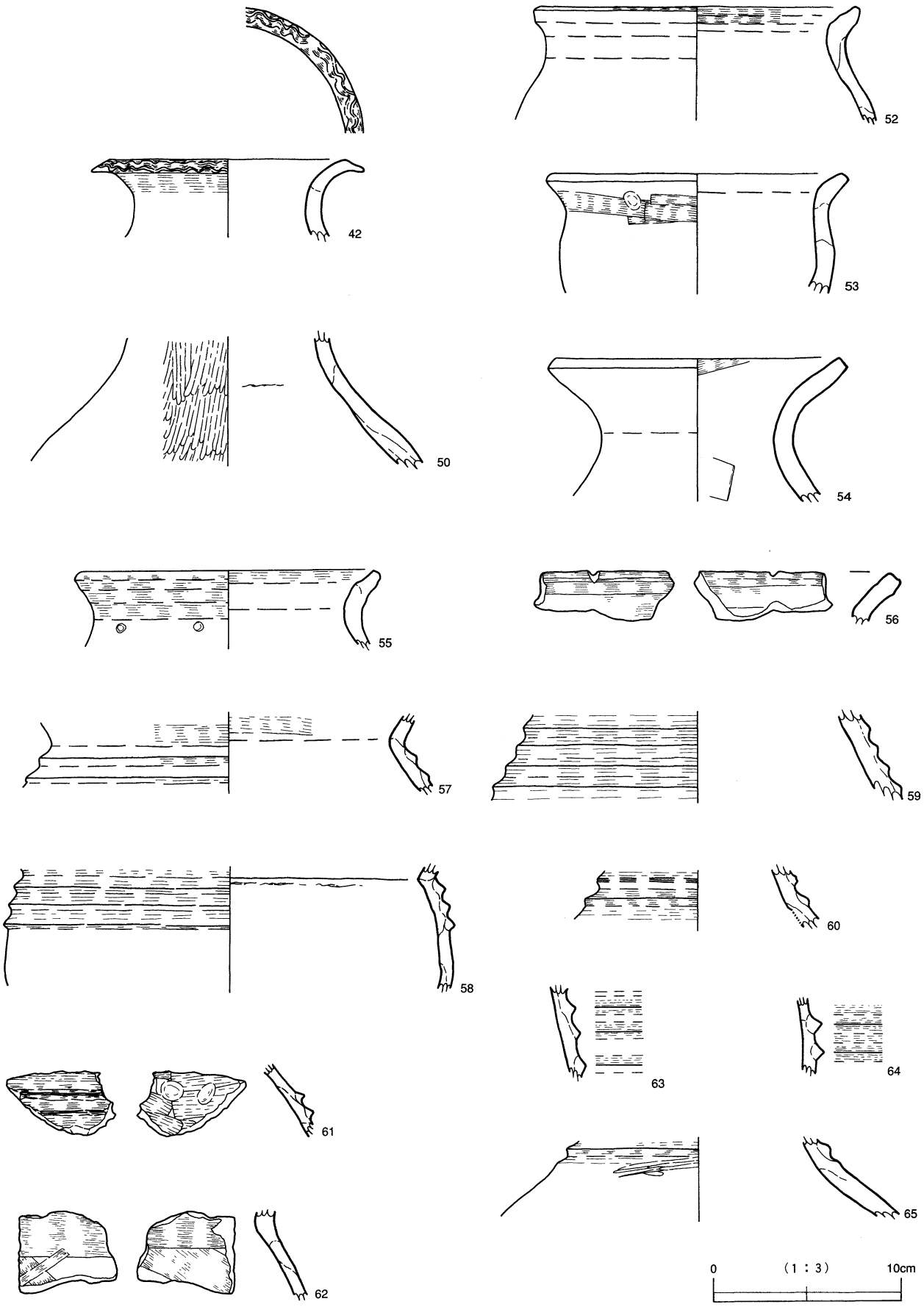
鉢２類は「口縁部が緩やかに外反する「く」の字状の口縁部で、内側に稜を持たないもの。」と分類概念を定義した。83は口縁部が残存し、やや膨らみをもつ胴部から緩やかに外反し、口唇部近くで強く反る。

③鉢３類（第14図　84）

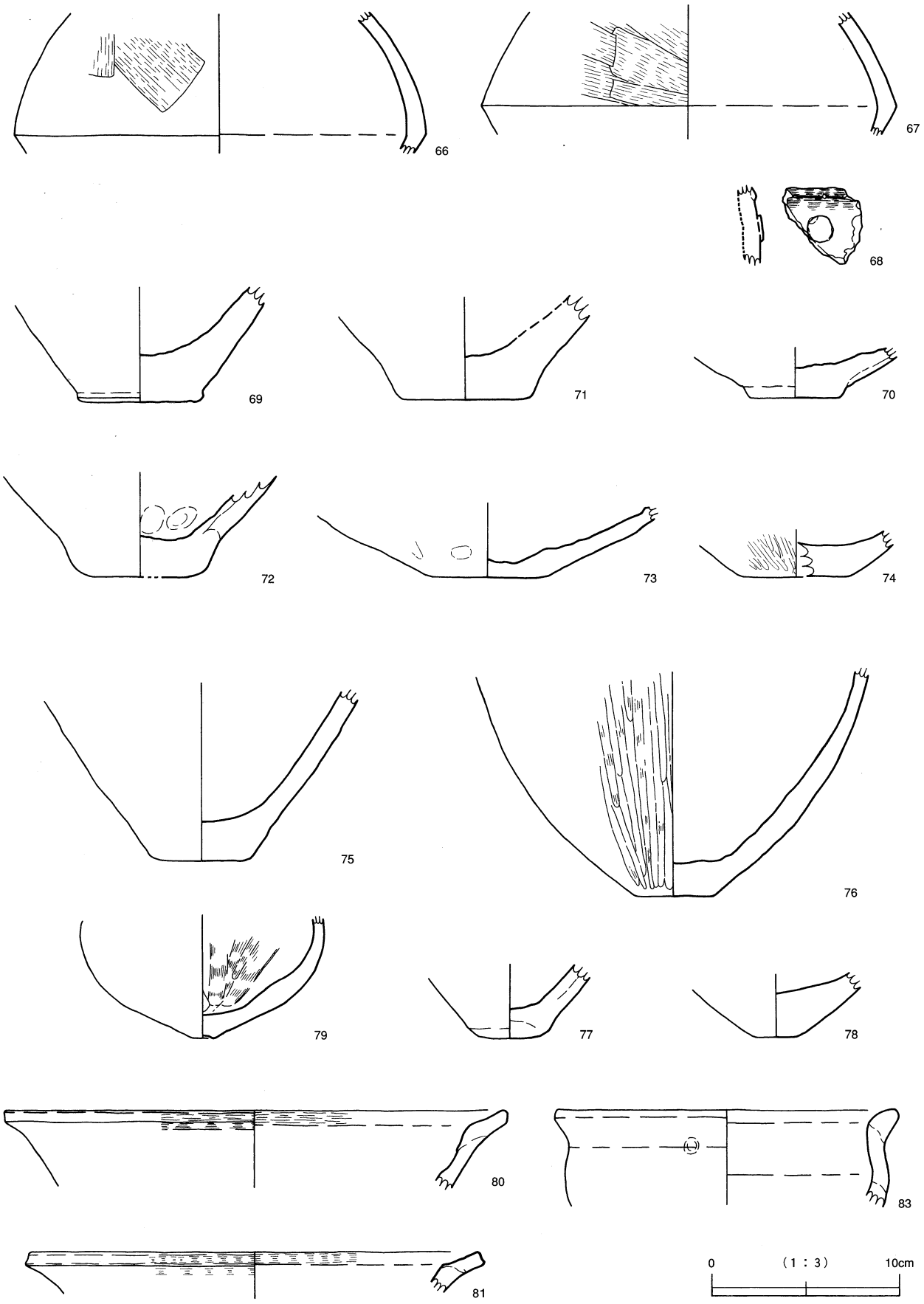
鉢３類は「口唇部がわずかに反り気味なもの、或いは直線的なもので、口縁部が直線的に伸びるもの。」と分類概念を定義した。84は口縁部が残存し、直線的に伸び、口唇部は平坦である。



第11図　穴倉遺跡　弥生土器　3



第12図　穴倉遺跡　弥生土器　4



第13図　穴倉遺跡　弥生土器　5

4　高坏

高坏は１類のみの分類となった。分類概念については下記のとおりである。

①高坏１類（第 14 図　85・86）

高坏１類は「逆Ｌ字状口縁を呈し、口縁部上位面に直線的に延びる平面をもつもの。口縁部内側に明瞭な稜をもつ。」と分類概念を定義した。85 は口縁部から胴部が残存する。口縁部上面は平坦で、口縁部内側はわずかに肥厚する。口唇部は丸みをもつ。86 は口縁部が残存し、口縁部上面は平坦で、その平坦面に、工具による小波状の沈線文が施される。口縁部内面にわずかな張り出しをもつ。

5　大甕

大甕は口縁部・胴部の形態により１～３類に分類した。分類概念については下記のとおりである。

①大甕１類（第 14 図　87・88）

大甕１類は「頸部がわずかに締まり、「く」の字状に外反する口縁部で、内側に稜をもたないもの。胴部上位に大きな突帯を施す。」と分類概念を定義した。87・88 は口縁部から胴部が残存する。87 は「く」の字状に外反する口縁部が剥離し、その下位の三角突帯が残存し廻る。88 は「く」の字状に外反する口縁部の下位に三角突帯が廻る。87・88 は同一個体と思われる。

②大甕２類（第 14 図　89～92）

大甕２類は「直立気味の口縁部下位に、突帯を施すもの。」と分類概念を定義した。89 は口縁部から胴部が残存する。口縁部はわずかに内湾し、口唇部は丸くおさまる。口縁部下位に上向きに張り出して三角突帯が廻る。胴部は底部に向かって緩やかに窄まる。突帯付近が器の最大径をとると思われる。90・91 は口縁部が残存する。口縁部は直行し、口唇部は平坦である。口縁部下位に三角突帯がわずかに上向きに張り出し三角突帯が廻る。92 は口縁部から胴部が残存し、口縁部は直行し、口唇部は明瞭な平坦面を作る。他の遺物と比べ口縁部下位に貼り付けられた三角突帯の位置が上がり気味で、突帯も比較的小さい。胴部は 89 と同様に底部に向かって緩やかに窄まる。

③大甕３類（第 14 図　93）

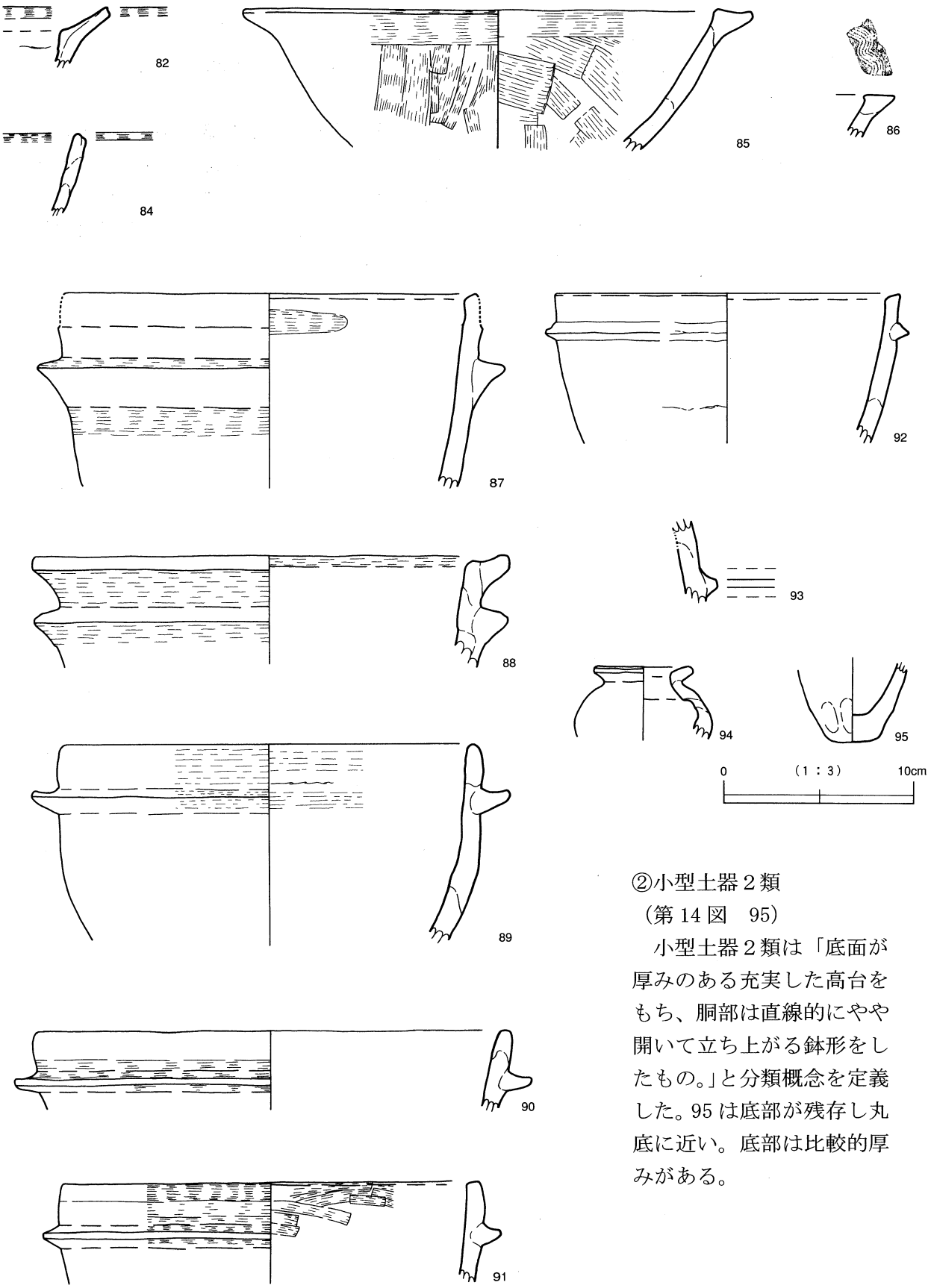
大甕３類は「貼りのある胴部中位に断面が「コ」の字状の突帯を施したもの。」と分類概念を定義した。93 は胴部が残存し、突帯中央に凹みが見られる。

6　小型土器

小型土器は口縁部・底部の形状により１・２類に分類した。分類概念については下記のとおりである。

①小型土器１類（第 14 図　94）

小型土器１類は「張りのある胴部から大きく外反する小型の広口壷の口縁部であるもの。」と分類概念を定義した。94 は口縁部が大きく外反し、口唇部は丸くおさまる。胴部内面は手捏ね調整が施され歪である。



②小型土器２類
（第 14 図　95）

小型土器２類は「底面が厚みのある充実した高台をもち、胴部は直線的にやや開いて立ち上がる鉢形をしたもの。」と分類概念を定義した。95 は底部が残存し丸底に近い。底部は比較的厚みがある。

第14図　穴倉遺跡　弥生土器　6

（2）成川式土器（第15図　96～106）

本遺跡からは古墳時代の遺物として成川式土器がⅡ層より出土している。それらの遺物は甕・壷・鉢に分類される。

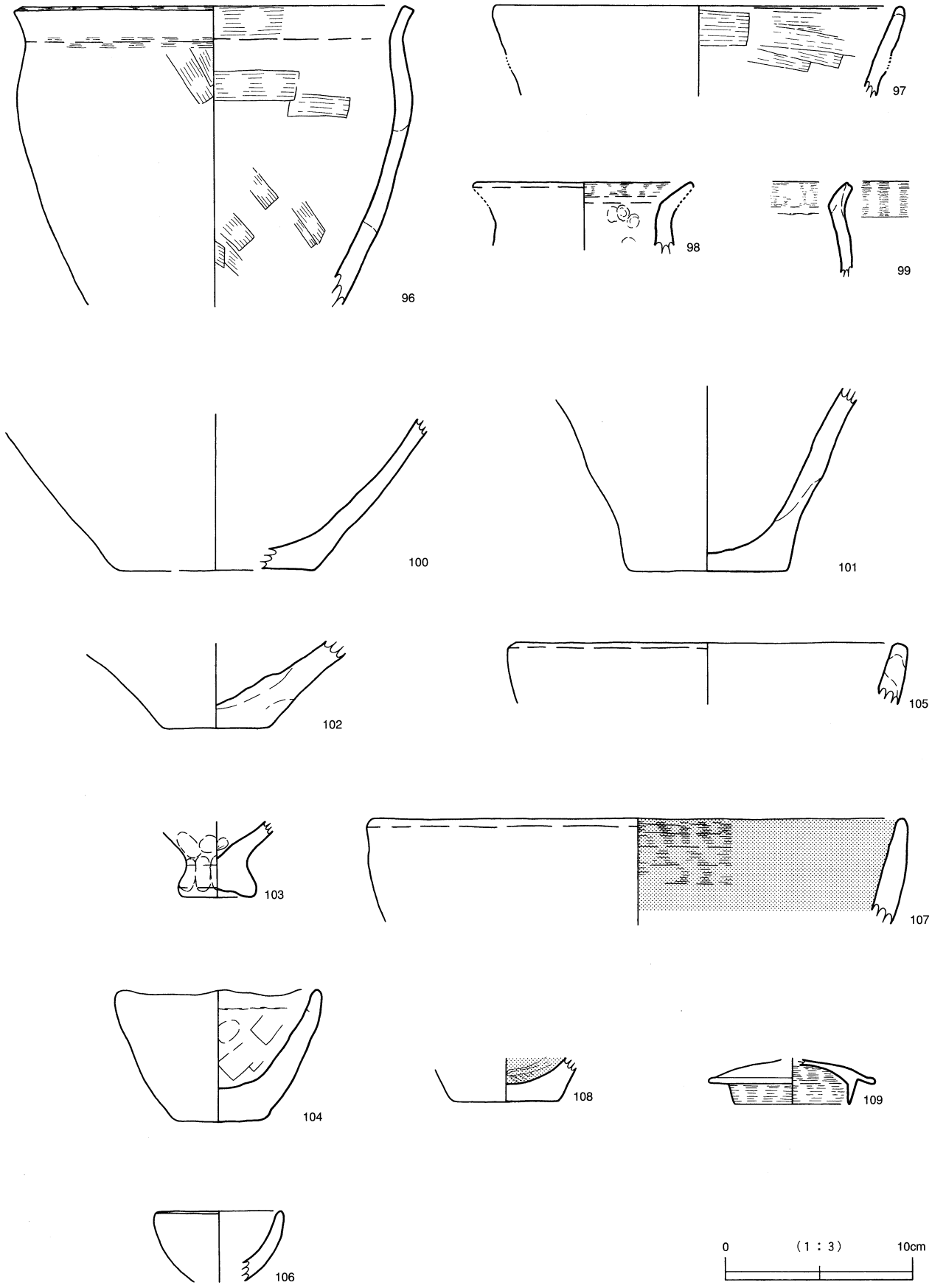
96から98は甕である。96は口縁部から胴部が残存する。「く」の字状の口縁部は直行し、口縁部内部の稜は弱い。胴部はやや膨らみをもつ。97・98は口縁部が残存する。97は口縁部が直行し、口縁部下位に突帯が廻っていたと思われる痕跡が残る。口唇部は丸みを帯びる。98は口縁部が外反し、口縁部は口唇部に向かって先細りしており、口唇部は丸くおさまる。口径が小さく比較的小型の甕と思われる。99から103は壷である。99は口縁部が残存し、口縁部は「く」の字状に外反する。比較的短頸の口縁部である。口唇部はわずかに凹む。100から102は胴部から底部が残存し、底面の張り出しが見られず広い平坦面をもつ平底である。100は胴部が開いて直行する。胴部は比較的器壁が薄い。101は100よりも胴部が立ち上がり、器壁は歪である。102は胴部が大きく開いて直行するように思われる。103は底部が残存する。わずかに上底の底面で、その成形・調整は歪で粗い。底径が狭く比較的小型の壷、あるいはミニチュア土器の可能性がある。底面は104から106は鉢である。104は完形の鉢である。器壁の成形・調整が粗く歪で、底径が狭く、部分によって明瞭な平坦面をもたず、丸底気味の部分がある。105・106は口縁部が残存する。105は口縁部がわずかに内湾すると思われ、口唇部は平坦面をもつ。106は口縁部が内湾し、口唇部は丸くおさまる。口径が小さく比較的小型の鉢と思われる。

（3）内黒土器（第15図　107・108）

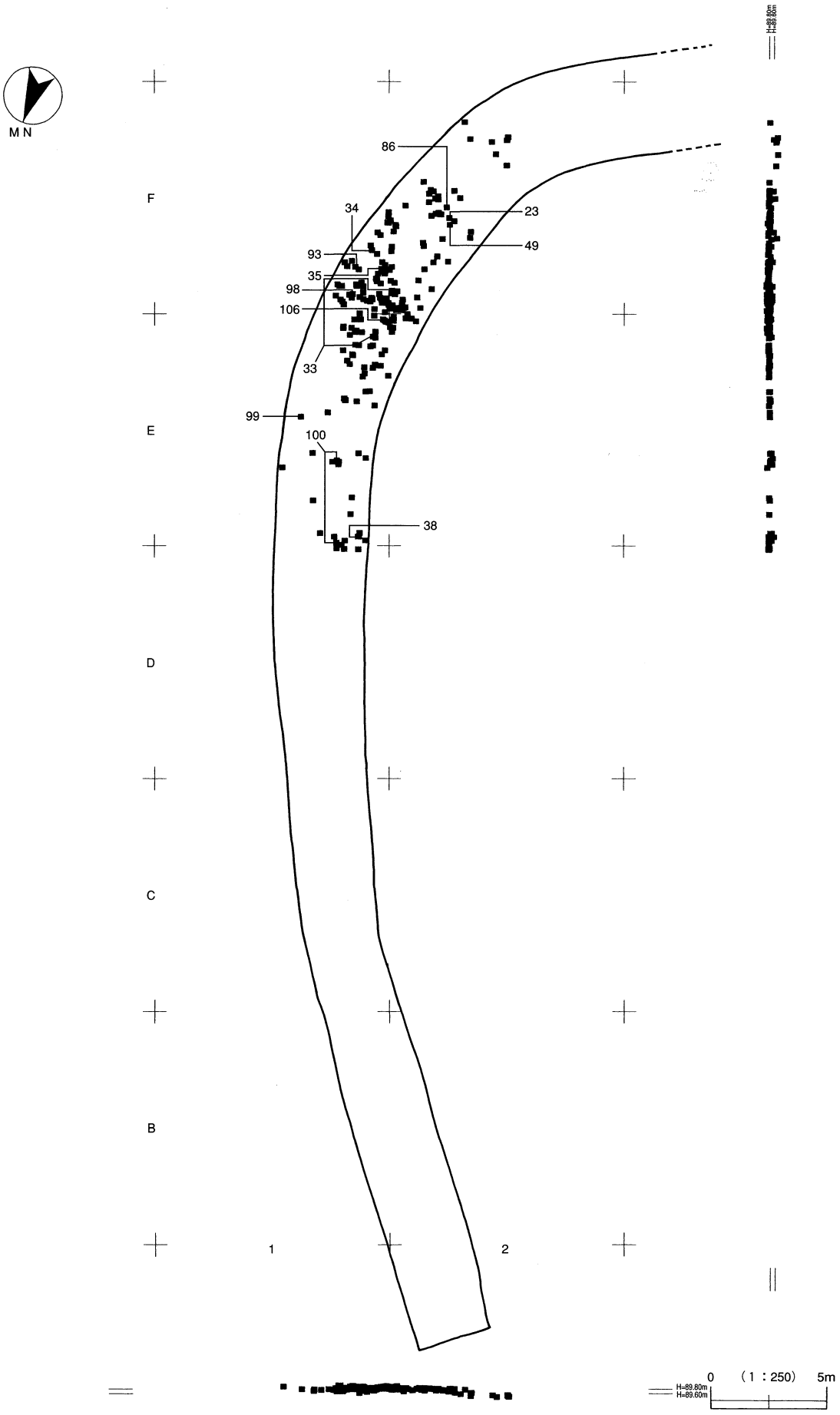
本遺跡からは古代の遺物として内黒土器がⅡ層より２点（107・108）出土している。107は鉢の口縁部と思われ、やや開いて直行し、口唇部は丸くおさまる。108は坏の底部と思われ、体部の底部からの立ち上がりが角をもつ。

（4）陶器（第15図　109）

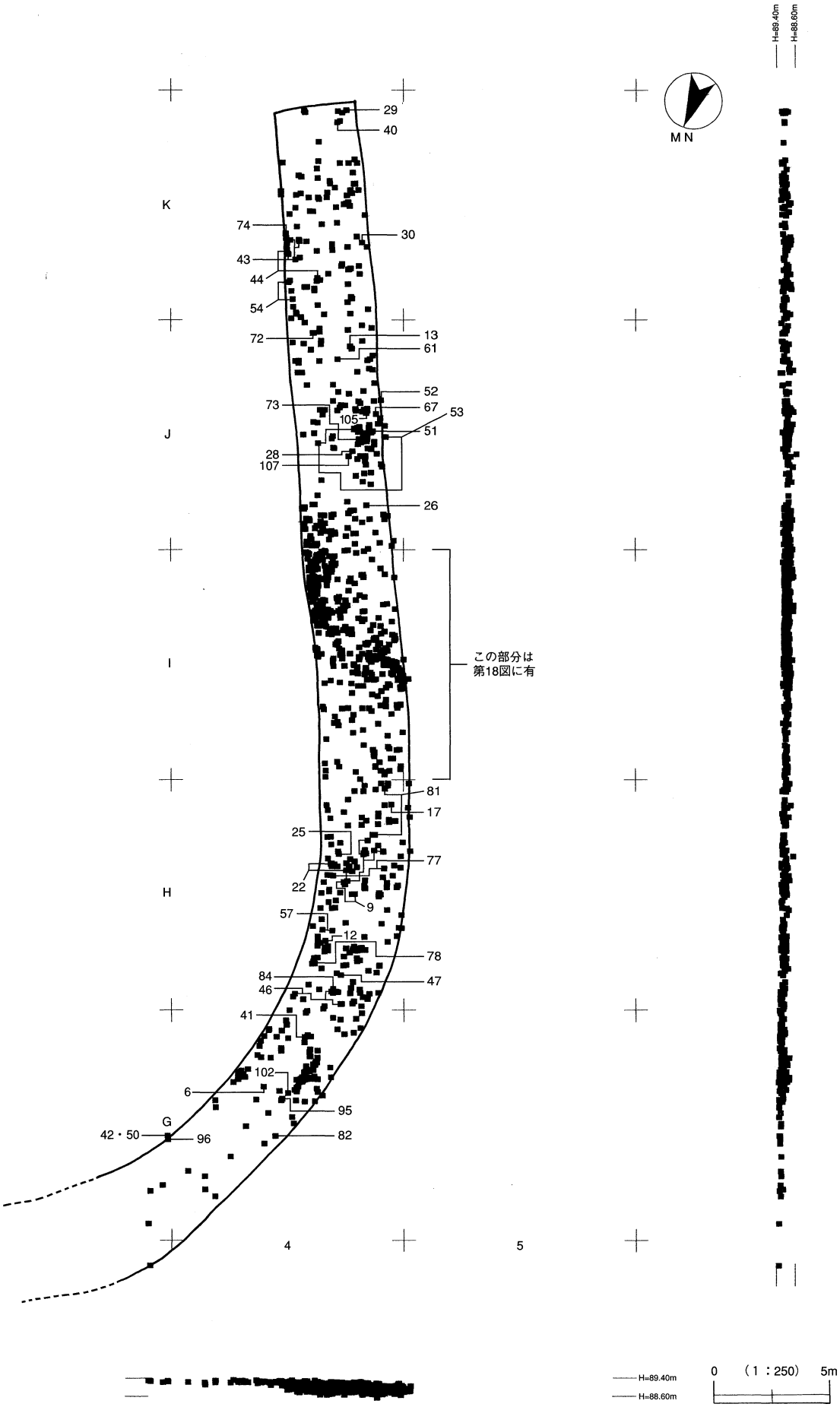
本遺跡から陶磁器類は包含層中からほとんど確認することは出来なかったが、表採遺物として陶器片が確認することができた。Ⅱ層の上層が表土層に削平されている可能性もあり、本遺跡出土遺物として比較的残存している陶器片（109）を実測・図化した。109は黒薩摩の急須の蓋と思われ褐釉色を呈し、頂部の摘みが欠ける。



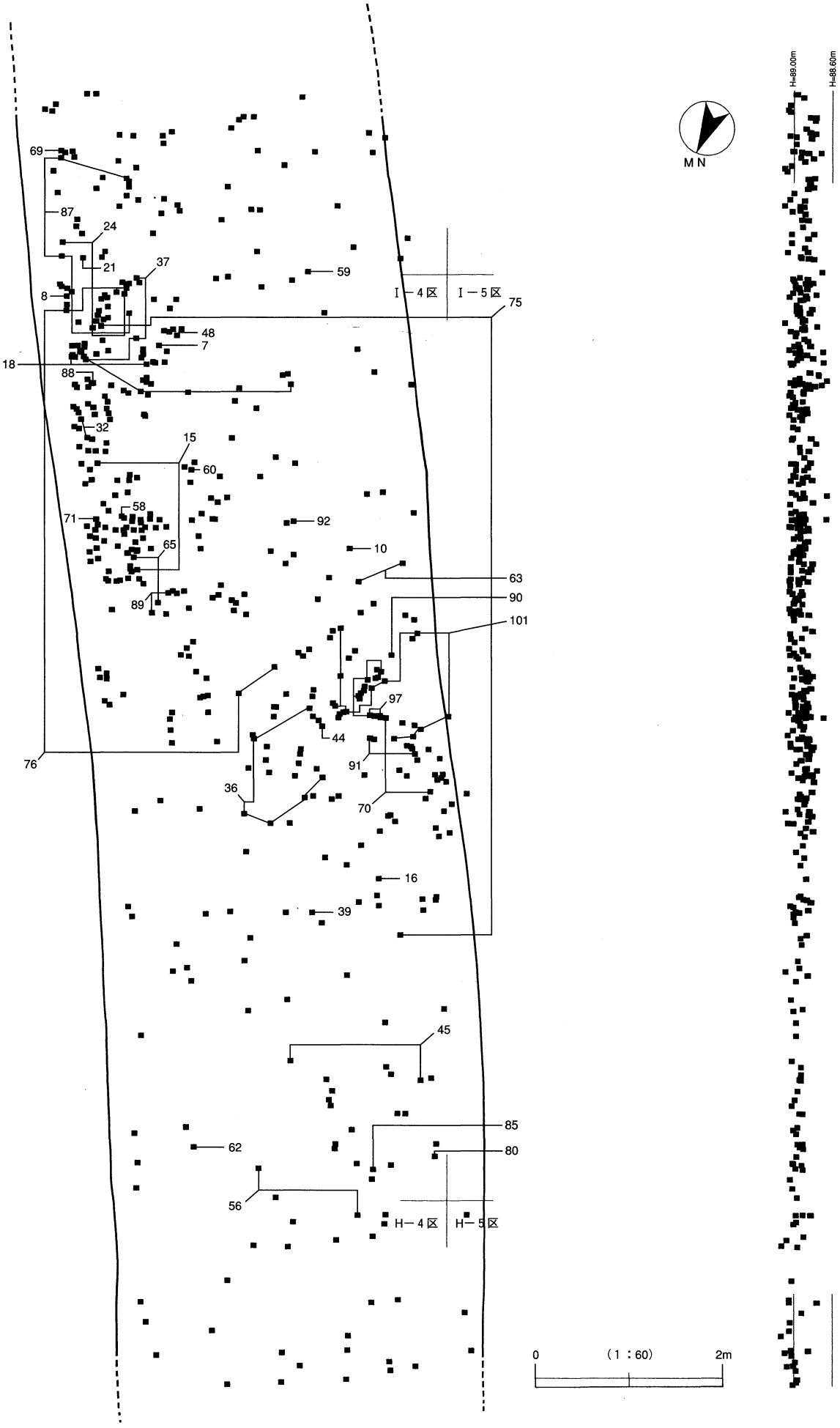
第15図　穴倉遺跡　成川式土器・内黒土器・陶器



第16図　穴倉遺跡　Ⅱ層出土　弥生土器・成川式土器　遺物出土状況図（B～F－1・2区）



第17図　穴倉遺跡　Ⅱ層出土　弥生土器・成川式土器　遺物出土状況図（F～K－4・5区）

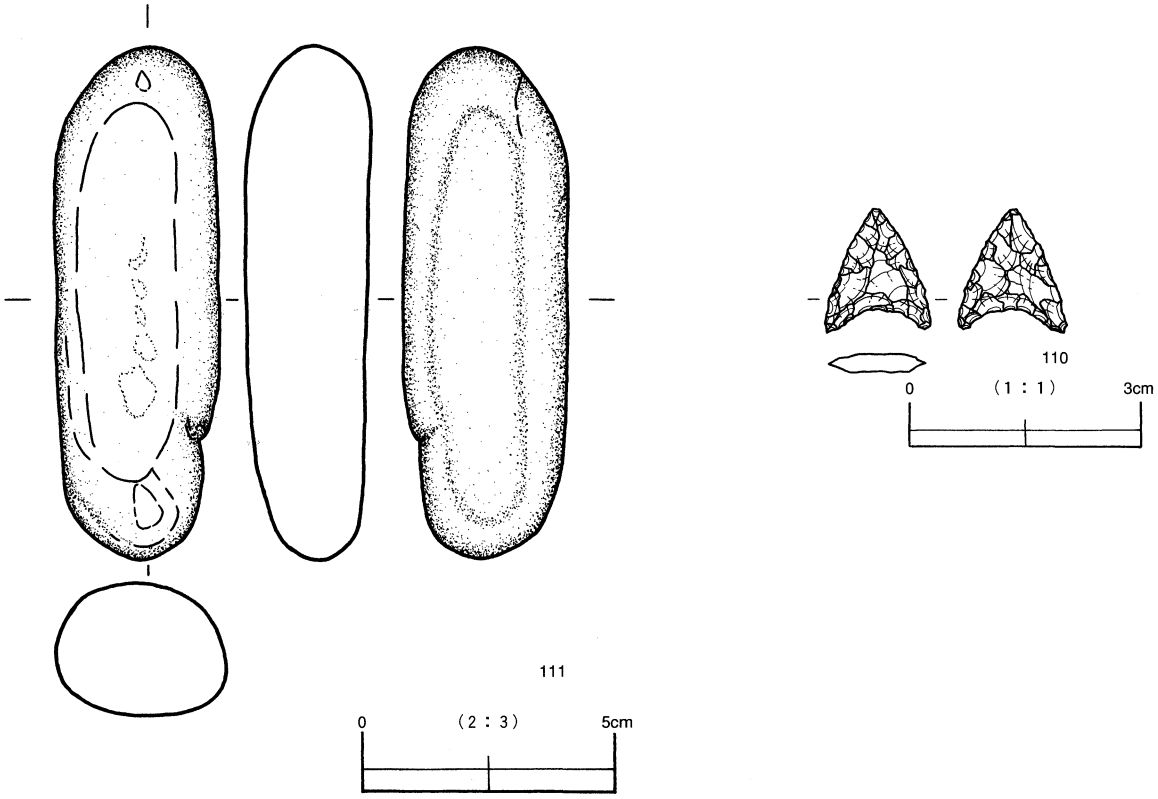


第18図　穴倉遺跡　Ⅱ層出土　弥生土器・成川式土器　遺物出土状況図（Ⅰ－4区）

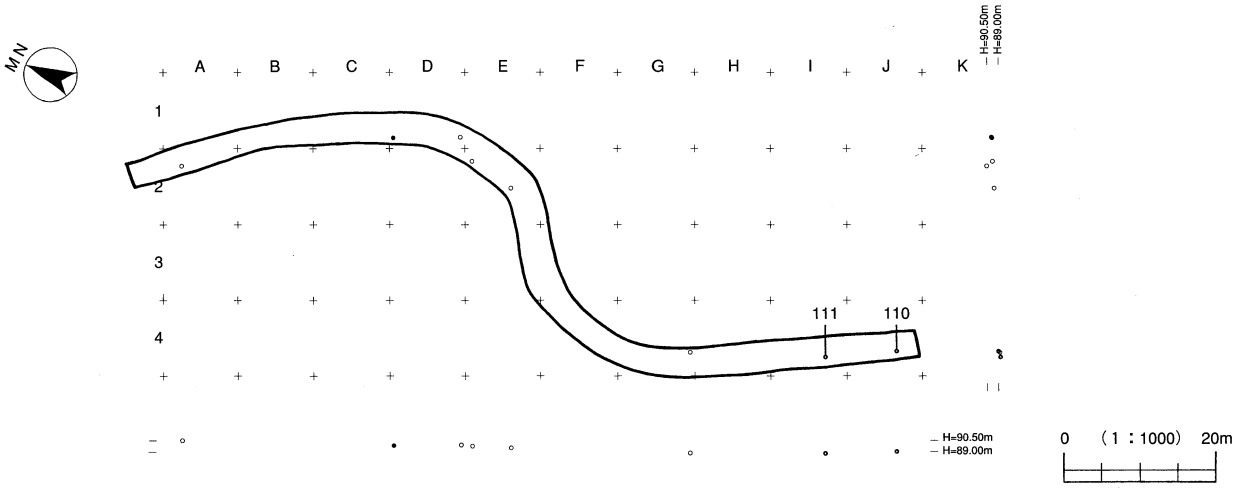
石器（第19図　110・111）

本遺跡からⅡ層より石器として確認できる遺物は２点、軽石４点、石１点が出土し、その２点（110・111）を実測・図化した。

110 は安山岩製の石鏃であり、抉入部が比較的浅い抉りをもつ薄手の石鏃である。111 は棒状の磨石である。表面は研磨による磨耗が見られ、底面は平坦に近い。表面に赤変した部分が見られる。



第19図　穴倉遺跡　石器



第20図　穴倉遺跡　Ⅱ層出土　石器出土状況図

第５表　穴倉遺跡　弥生土器　甕１～７類　土器観察表

挿図番号	番号	注記番号	出土区 出土層 (遺構)	器種	部位	分類	胎土						色調 上段：外面 下段：内面		施文・調整 上段：外面 下段：内面	法量（cm）			備考
							石・長	雲	角・輝	礫	赤	砂				口径	底径	器高	
第９図	6	1196	G－4 区 Ⅱ層	甕	口縁部	弥生土器		○				○	5YR6/4 5YR5/4	にぶい橙色 にぶい赤褐色	横ナデ・ナデ 横ナデ・ナデ	25.4	－	2.6	甕１類 外面に煤付着
第９図	7	529	I－4 区 Ⅱ層	甕	口縁部	弥生土器	○	○		○	○	○	7.5YR6/6 7.5YR6/6	橙色 橙色	ナデ ナデ	－	－	1.8	甕１類
第９図	8	493	I－4 区 Ⅱ層	甕	口縁部	弥生土器	○	○		○	○	○	7.5YR6/6 7.5YR6/6	橙色 橙色	ナデ ナデ	－	－	1.5	甕１類
第９図	9	1015・1054	H－4 区 Ⅱ層	甕	口縁部	弥生土器	○	○			○		5YR6/6 5YR6/6	橙色 橙色	横ナデ・ナデ 横ナデ・ナデ	19.4	－	2.8	甕２類
第９図	10	649	I－4 区 Ⅱ層	甕	口縁部	弥生土器	○	○				○	5YR6/6 5YR6/6	橙色 橙色	横ナデ・ナデ 横ナデ・斜ナデ	23.0	－	2.8	甕３類
第９図	11	92	E－2 区 Ⅱ層	甕	口縁部	弥生土器	○	○		○		○	5YR5/4 5YR5/6	にぶい赤褐色 明赤褐色	ナデ・横ナデ ナデ	20.6	－	2.4	甕３類 外面に煤付着
第９図	12	1058・1061	H－4 区 Ⅱ層	甕	口縁部	弥生土器		○			○	○	5YR5/4 5YR5/4	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	横ナデ ナデ	12.0	－	2.0	甕３類 内外面に煤付着
第９図	13	801	J－4 区 Ⅱ層	甕	口縁部	弥生土器		○				○	7.5YR5/3 7.5YR5/3	にぶい褐色 にぶい褐色	横ナデ 横ナデ	－	－	3.2	甕３類 外面に煤付着
第９図	14	—	表採	甕	口縁部	弥生土器	○	○		○	○	○	10YR6/4 7.5YR6/6	にぶい黄橙色 橙色	横ナデ ナデ	－	－	3.6	甕３類
第９図	15	561・864	I－4 区 Ⅱ層	甕	口縁部～ 胴部	弥生土器		○				○	7.5YR5/3 7.5YR6/4	にぶい褐色 にぶい橙色	横ナデ 横ナデ・ナデ	20.8	－	5.1	甕４類 外面に煤付着
第９図	16	776・777	I－4 区 Ⅱ層	甕	口縁部～ 胴部	弥生土器		○		○	○	○	5YR6/6 7.5YR6/4	橙色 にぶい橙色	横ナデ・ナデ 横ナデ・ナデ	14.4	－	5.8	甕４類 外面に煤付着
第９図	17	947	H－4 区 Ⅱ層	甕	口縁部	弥生土器		○				○	5YR5/6 2.5Y4/2	明赤褐色 暗灰黄色	横ナデ・ナデ 斜ナデ 横ナデ・ナデ	－	－	2.5	甕５類 内面に煤付着
第９図	18	535・830	I－4 区 Ⅱ層	甕	口縁部～ 胴部	弥生土器	○	○				○	7.5YR6/6 7.5YR6/6	橙色 橙色	ナデ・横ナデ 横ナデ・板ナデ	35.0	－	7.4	甕６類 外面に煤付着
第９図	19	110・148 149	F－1 区 Ⅱ層	甕	口縁部～ 胴部	弥生土器		○		○	○	○	7.5YR5/4 5YR5/6	にぶい褐色 明赤褐色	横ナデ・ナデ 横ナデ・ナデ	31.2	－	13.4	甕６類 外面に煤付着
第10図	20	155・219	F－1・2 区 Ⅱ層	甕	口縁部	弥生土器	○	○			○	○	7.5YR5/4 7.5YR5/4	にぶい褐色 にぶい褐色	横ナデ 横ナデ・ナデ	31.6	－	5.1	甕６類 外面に煤付着
第10図	21	486	J－4 区 Ⅱ層	甕	口縁部	弥生土器	○	○		○		○	7.5YR6/6 7.5YR6/6	橙色 橙色	ナデ・横ナデ 丁寧なナデ 横ナデ 丁寧なナデ	30.8	－	3.5	甕６類
第10図	22	971・979・980 982～985 988・997 1017・1051	H－4 区 Ⅱ層	甕	口縁部～ 胴部	弥生土器	○	○			○	○	5YR6/6 5YR6/6	橙色 橙色	横ナデ・ナデ 横ナデ・ナデ ナデ磨き	17.0	－	17.3	甕６類
第10図	23	190	F－2 区 Ⅱ層	甕	口縁部～ 胴部	弥生土器		○				○	5YR6/6 5YR6/6	橙色 橙色	ナデ・板ナデ ナデ・板ナデ	12.0	－	5.3	甕６類 内面に黒斑
第10図	24	485・513 824	I・J－4 区 Ⅱ層	甕	口縁部～ 胴部	弥生土器		○		○		○	7.5YR6/6 7.5YR6/4	橙色 にぶい橙色	横ナデ・ナデ ナデ・横ナデ 板ナデ	－	－	9.1	甕６類
第９図	25	986	H－4 区 Ⅱ層	甕	口縁部	弥生土器	○	○			○	○	7.5YR5/4 7.5YR5/4	にぶい褐色 にぶい褐色	横ナデ・ナデ 横ナデ・ナデ	－	－	2.5	甕６類
第９図	26	422	J－4 区 Ⅱ層	甕	口縁部	弥生土器		○		○		○	7.5YR6/6 7.5YR5/4	橙色 にぶい褐色	横ナデ・ナデ 横ナデ・ナデ	－	－	2.2	甕６類 外面に煤付着
第９図	27	—	表採	甕	口縁部	弥生土器		○				○	10YR7/4 10YR6/4	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	横ナデ 横ナデ・ナデ	－	－	2.1	甕６類 外面に煤付着
第９図	28	393	J－4 区 Ⅱ層	甕	口縁部	弥生土器		○				○	10YR6/4 7.5YR6/4	にぶい黄橙色 にぶい橙色	横ナデ 横ナデ・ナデ	－	－	2.0	甕６類 外面に煤付着
第10図	29	229	K－4 区 Ⅱ層	甕	胴部	弥生土器	○	○			○	○	7.5YR6/4 5YR6/6	にぶい橙色 橙色	横ナデ 板ナデ・ナデ	－	－	5.8	甕６類 外面に煤付着
第10図	30	282	K－4 区 Ⅱ層	甕	胴部	弥生土器		○		○		○	7.5YR5/4 7.5YR5/4	にぶい褐色 にぶい褐色	横ナデ ナデ	－	－	4.1	甕６類 口縁部に近い
第10図	31	143	F－1 区 Ⅱ層	甕	胴部	弥生土器	○	○		○		○	7.5YR6/4 7.5YR5/4	にぶい橙色 にぶい褐色	横ナデ 横ナデ	－	－	3.3	甕６類 口縁部に近い
第10図	32	553・554	I－4 区 Ⅱ層	甕	口縁部～ 胴部	弥生土器		○			○	○	10YR5/3 10Y3/1	にぶい黄褐色 オリーブ黒色	横ナデ・ナデ 横ナデ・ナデ	34.0	－	6.1	甕７類 内面黒斑
第11図	33	58・66 152	E－1・F－2 区 Ⅱ層	甕	口縁部～ 胴部	弥生土器		○		○		○	5YR5/6 5YR5/6	明赤褐色 明赤褐色	横ナデ・ナデ 横ナデ・ナデ	－	－	11.3	甕７類
第11図	34	137	F－1 区 Ⅱ層	甕	口縁部～ 胴部	弥生土器		○				○	7.5YR5/4 10YR6/3	にぶい褐色 にぶい黄橙色	横ナデ・ナデ ハケ目・ナデ	－	－	5.2	甕７類 外面に煤付着 内面に黒斑

第６表　穴倉遺跡　弥生土器　甕(底)１～３類　土器観察表

挿図番号	番号	注記番号	出土区 出土層 (遺構)	器種	部位	分類	胎土						色調 上段：外面 下段：内面		施文・調整 上段：外面 下段：内面	法量（cm）			備考
							石・長	雲	角・輝	礫	赤	砂				口径	底径	器高	
第11図	35	142	F－1 区 Ⅱ層	甕	底部	弥生土器		○		○		○	5YR6/6 5YR6/6	橙色 橙色	横ナデ・ナデ ナデ	－	6.2	3.2	甕(底) 1 類
第11図	36	697・749・755 757・758・875	I－4 区 Ⅱ層	甕	胴部～ 底部	弥生土器		○		○		○	5YR6/6 7.5YR6/4	橙色 にぶい橙色	ナデ・板ナデ 横ナデ ナデ	－	9.0	8.4	甕(底) 2 類
第11図	37	504・511・524 537・611・616 832・892	I－4 区 Ⅱ層	甕	胴部～ 底部	弥生土器		○		○		○	7.5YR6/4 10YR6/3	にぶい橙色 にぶい黄橙色	板ナデ・ナデ 横ナデ ヘラ削り	－	8.6	8.1	甕(底) 2 類
第11図	38	214	E－1 区 Ⅱ層	甕	底部	弥生土器		○			○	○	7.5YR6/6 7.5YR7/4	橙色 にぶい橙色	ナデ 磨き	－	7.6	5.1	甕(底) 3 類 脚付 内外面に黒斑

第７表　穴倉遺跡　弥生土器　壷１～７類　土器観察表

挿図番号	番号	注記番号	出土区 出土層 (遺構)	器種	部位	分類	胎土						色調 上段：外面 下段：内面		施文・調整 上段：外面 下段：内面	法量（cm）			備考
							石・長	雲	角・輝	礫	赤	砂				口径	底径	器高	
第11図	39	788	I−4区 Ⅱ層	壷	口縁部 ～胴部	弥生土器		○			○	○	7.5YR5/3 7.5YR5/3	にぶい褐色 にぶい褐色	横ナデ・ナデ ナデ	23.8	−	4.0	壷１類 二叉状口縁
第11図	40	231	K−4区 Ⅱ層	壷	口縁部 ～胴部	弥生土器	○			○		○	10YR7/4 2.5YR6/4	にぶい黄橙色 にぶい黄色	横ナデ・ナデ 横ナデ・ナデ	11.2	−	5.4	壷１類 二叉状口縁
第11図	41	1140	G−4区 Ⅱ層	壷	口縁部	弥生土器		○				○	5YR6/6 5YR6/6	橙色 橙色	横ナデ・ナデ 横ナデ・ナデ	−	−	2.9	壷１類 内面に黒斑 外面に煤付着
第12図	42	1234	G−3区 Ⅱ層	壷	口縁部 ～頸部	弥生土器	○				○	○	5YR6/6 7.5YR6/4	橙色 にぶい橙色	横ナデ・ナデ磨き ナデ磨き・ナデ	12.6	−	4.1	壷２類 口唇に小波状の沈線文 外面に煤付着 50と同一個体
第11図	43	273・276 290・291	K−4区 Ⅱ層	壷	口縁部 ～頸部	弥生土器	○	○		○		○	7.5YR5/4 7.5YR5/4	にぶい褐色 にぶい褐色	ナデ・横ナデ ナデ	13.2	−	5.7	壷２類 44と同一個体
第11図	44	293・297 700・一括	I・K−4区 C区 Ⅱ層	壷	口縁部	弥生土器		○				○	7.5YR5/3 7.5YR5/4	にぶい褐色 にぶい褐色	横ナデ・ナデ ナデ	14.0	−	4.2	壷２類 43と同一個体
第11図	45	913・916	I−4区 Ⅱ層	壷	口縁部	弥生土器		○				○	5YR6/6 5YR6/6	橙色 橙色	横ナデ・ナデ 横ナデ・ナデ	11.0	−	2.7	壷２類
第11図	46	1106・1109 1117	H−4区 Ⅱ層	壷	口縁部	弥生土器	○	○				○	7.5YR6/6 7.5YR6/6	橙色 橙色	横ナデ・ナデ ナデ	11.8	−	3.8	壷２類
第11図	47	1092	H−4区 Ⅱ層	壷	口縁部	弥生土器		○				○	7.5YR6/6 10YR6/4	橙色 にぶい黄橙色	横ナデ・ナデ ナデ	15.0	−	2.5	壷２類 外面に煤付着
第11図	48	527・528	I−4区 Ⅱ層	壷	口縁部	弥生土器		○		○		○	7.5YR5/4 7.5YR5/4	にぶい褐色 にぶい褐色	横ナデ 丁寧なナデ ナデ	21.6	−	5.0	壷２類 口唇部に小波状沈線文 外面に煤付着
第11図	49	188	F−2区 Ⅱ層	壷	口縁部	弥生土器	○	○				○	5YR6/6 5YR5/6	橙色 にぶい橙色	横ナデ 丁寧なナデ 横ナデ 丁寧なナデ	14.8	−	4.7	壷２類 口唇部に幾何学状沈線文 外面に煤付着
第12図	50	1234	G−3区 Ⅱ層	壷	頸部～ 胴部	弥生土器		○				○	5YR6/6 7.5YR6/4	橙色 にぶい橙色	ヘラ磨き ナデ	−	−	6.7	壷２類 42と同一個体
第11図	51	377	J−4区 Ⅱ層	壷	口縁部	弥生土器		○				○	5YR6/6 5YR6/6	橙色 橙色	横ナデ・ナデ 板ナデ・ナデ	17.0	−	3.8	壷３類
第12図	52	371	J−4区 Ⅱ層	壷	口縁部 ～胴部	弥生土器		○	○			○	5YR6/6 7.5YR6/6	橙色 橙色	ナデ 板ナデ・ナデ	16.0	−	6.0	壷３類
第12図	53	376・398 804	J−4区 Ⅱ層	壷	口縁部 ～胴部	弥生土器		○			○	○	5YR6/6 5YR6/6	橙色 橙色	ナデ・横ナデ 指頭圧痕 ナデ	15.6	−	6.5	壷３類
第12図	54	438・439 444	J−4区 Ⅱ層	壷	口縁部 ～頸部	弥生土器		○	○		○	○	5YR6/6 5YR6/6	橙色 橙色	ナデ ナデ・板ナデ	15.3	−	7.3	壷４類
第12図	55	374・381 386・395	J−4区 Ⅱ層	壷	口縁部	弥生土器		○				○	5YR6/6 5YR6/6	橙色 橙色	横ナデ・ナデ 横ナデ・ナデ	15.6	−	4.0	壷４類 頸部に焼成前穿孔２箇所
第12図	56	939・944	I−4区 Ⅱ層	壷	口縁部	弥生土器	○	○				○	7.5YR6/4 2.5Y5/3	にぶい橙色 黄褐色	横ナデ・ナデ 横ナデ・ナデ	−	−	2.7	壷４類 内外面に黒斑
第12図	57	1048・1049	H−4区 Ⅱ層	壷	頸部～ 胴部	弥生土器		○				○	7.5YR5/4 7.5YR5/4	にぶい褐色 にぶい褐色	横ナデ・ナデ 横ナデ 丁寧なナデ	−	−	3.5	壷４類 ２条の三角突帯
第12図	58	573	I−4区 Ⅱ層	壷	胴部	弥生土器	○	○		○		○	7.5YR5/4 7.5YR5/4	にぶい褐色 にぶい褐色	横ナデ・ナデ ナデ	−	−	6.2	壷４類 外面に煤付着 ３条の三角突帯
第12図	59	472	J−4区 Ⅱ層	壷	胴部	弥生土器	○			○	○		2.5Y8/3 2.5Y7/4	淡黄色 浅黄色	横ナデ後ナデ磨き ナデ	−	−	3.9	壷４類 外面に煤付着 ４条の三角突帯
第12図	60	630	I−4区 Ⅱ層	壷	胴部	弥生土器	○	○		○		○	7.5YR6/6 10YR6/4	橙色 にぶい黄橙色	ナデ ナデ	−	−	2.7	壷４類 ２条の三角突帯
第12図	61	337	J−4区 Ⅱ層	壷	胴部	弥生土器		○			○	○	7.5YR5/4 5YR5/4	にぶい褐色 にぶい赤褐色	横ナデ ハケ目・指頭圧痕	−	−	3.9	壷４類 ２条の三角突帯 外面に煤付着
第12図	62	932	I−4区 Ⅱ層	壷	胴部	弥生土器		○		○		○	10YR5/3 10YR5/3	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	横ナデ・斜ナデ 横ナデ・斜ナデ	−	−	4.5	壷４類 内面に煤付着
第12図	63	650・652	I−4区 Ⅱ層	壷	胴部	弥生土器		○		○		○	10YR6/4 10YR6/3	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ナデ ナデ	−	−	4.9	壷４類 ３条の三角突帯
第12図	64	3	B−2区 Ⅲ層	壷	胴部	弥生土器		○			○	○	7.5YR6/6 7.5YR6/6	橙色 橙色	ナデ ナデ	−	−	4.0	壷４類 ２条の三角突帯
第12図	65	595・606	I−4区 Ⅱ層	壷	頸部～ 胴部	弥生土器	○	○				○	7.5YR6/6 10YR6/4	橙色 にぶい黄橙色	横ナデ・ナデ ナデ	−	−	4.1	壷５類
第13図	66	378・389	J−4区 Ⅱ層	壷	胴部	弥生土器		○				○	5YR5/6 7.5YR6/6	明赤褐色 橙色	ナデ・ハケ目 ナデ	−	−	7.5	壷６類 外面に煤付着 67と同一個体
第13図	67	372	J−4区 Ⅱ層	壷	胴部	弥生土器		○				○	5YR5/6 7.5YR6/6	明赤褐色 橙色	ナデ・ハケ目 ナデ	−	−	6.5	壷６類 66と同一個体
第13図	68	218	F−1区 Ⅱ層	壷？	胴部	弥生土器？		○				○	10YR6/4 —	にぶい黄橙色 —	横ナデ —	−	−	4.1	壷７類 内面剥落

第８表　穴倉遺跡　弥生土器　壷(底)１～４類　土器観察表

挿図番号	番号	注記番号	出土区 出土層 (遺構)	器種	部位	分類	胎土						色調 上段：外面 下段：内面		施文・調整 上段：外面 下段：内面	法量(cm)			備考
							石・長	雲	角・輝	礫	赤	砂				口径	底径	器高	
第13図	69	440	J−4区 Ⅱ層	壷	胴部～ 底部	弥生土器	○	○				○	5YR6/6 2.5Y6/3	橙色 にぶい黄色	ナデ ナデ	−	6.2	5.3	壷(底)１類 外面に黒斑
第13図	70	720・755 886	I−4区 Ⅱ層	壷	胴部～ 底部	弥生土器		○	○			○	5YR6/6 7.5YR6/4	橙色 にぶい橙色	ナデ ナデ	−	4.8	2.2	壷(底)１類 外面に煤付着
第13図	71	569	I−4区 Ⅱ層	壷	胴部～ 底部	弥生土器		○		○		○	7.5YR6/6 10YR6/3	橙色 にぶい黄橙色	ナデ・ナデ磨き ナデ	−	6.4	4.5	壷(底)２類 外面に黒斑
第13図	72	325	J−4区 Ⅱ層	壷	胴部～ 底部	弥生土器	○	○		○		○	5YR5/6 5YR6/6	明赤褐色 橙色	ナデ・ナデ磨き ナデ・指頭圧痕	−	5.0	5.4	壷(底)２類 底面に黒斑
第13図	73	391	J−4区 Ⅱ層	壷	胴部～ 底部	弥生土器						○	5YR6/6 10YR7/4	橙色 にぶい黄橙色	ナデ ナデ	−	5.4	3.2	壷(底)３類 内面に煤付着
第13図	74	271	K−4区 Ⅱ層	壷	胴部～ 底部	弥生土器		○	○	○		○	7.5YR6/4 7.5YR5/3	にぶい橙色 にぶい褐色	ヘラ磨き・ナデ ナデ	−	5.0	1.7	壷(底)３類 外面に黒斑
第13図	75	514・783	I−4区 Ⅱ層	壷	胴部～ 底部	弥生土器		○		○		○	7.5YR6/6 7.5YR6/6	橙色 橙色	ナデ ナデ	−	4.4	8.6	壷(底)３類 外面に黒斑
第13図	76	495・499・503 666・686	I−4区 Ⅱ層	壷	胴部～ 底部	弥生土器	○	○		○		○	5YR6/6 5YR6/6	橙色 橙色	ヘラ磨き・ナデ ナデ	−	4.0	11.8	壷(底)３類 外面に黒斑
第13図	77	1000・1019	H−4区 Ⅱ層	壷	胴部～ 底部	弥生土器				○	○	○	10YR6/3 10YR6/4	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ナデ ナデ	−	2.4	3.2	壷(底)３類 外面に煤付着
第13図	78	1089	H−4区 Ⅱ層	壷	胴部～ 底部	弥生土器		○				○	7.5YR5/4 10YR5/3	にぶい褐色 にぶい黄褐色	ナデ ナデ	−	2.0	2.6	壷(底)３類
第13図	79	1158・1159・1163 1164・1166・1225 1226・1230	G−4区 Ⅱ層	壷	胴部～ 底部	弥生土器		○			○	○	7.5YR5/6 7.5YR4/6	明赤褐色 褐色	ナデ磨き ヘラ削り後ナデ ナデ	−	1.0	6.3	壷(底)４類 外面に煤付着

第９表　穴倉遺跡　弥生土器　鉢１～３類　土器観察表

挿図番号	番号	注記番号	出土区 出土層 (遺構)	器種	部位	分類	胎土						色調 上段：外面 下段：内面		施文・調整 上段：外面 下段：内面	法量(cm)			備考
							石・長	雲	角・輝	礫	赤	砂				口径	底径	器高	
第13図	80	923	I−4区 Ⅱ層	鉢	口縁部	弥生土器		○			○	○	7.5YR5/4 7.5YR6/6	にぶい褐色 橙色	板ナデ・横ナデ ナデ 板ナデ・ナデ	26.7	−	3.8	鉢１類 外面に煤付着
第13図	81	925・973	H−4区 Ⅱ層	鉢	口縁部	弥生土器		○				○	7.5YR6/6 10YR6/3	橙色 にぶい黄橙色	横ナデ・ナデ 横ナデ・ナデ	23.7	−	2.2	鉢１類 外面に煤付着 内面に黒斑
第14図	82	1202	G−4区 Ⅱ層	鉢	口縁部	弥生土器	○	○				○	10YR6/3 7.5YR5/4	にぶい黄橙色 にぶい褐色	ナデ・横ナデ ナデ・横ナデ	−	−	3.0	鉢１類 外面に煤付着
第13図	83	388	J−4区 Ⅱ層	鉢	口縁部	弥生土器						○	5YR6/6 5YR6/6	橙色 橙色	ナデ ナデ	18.3	−	5.2	鉢２類
第14図	84	1103	H−4区 Ⅱ層	鉢	口縁部	弥生土器		○				○	5YR5/6 5YR5/6	明赤褐色 明赤褐色	横ナデ・ナデ 横ナデ・ナデ	−	−	4.2	鉢３類

第10表　穴倉遺跡　弥生土器　高坏１類　土器観察表

挿図番号	番号	注記番号	出土区 出土層 (遺構)	器種	部位	分類	胎土						色調 上段：外面 下段：内面		施文・調整 上段：外面 下段：内面	法量(cm)			備考
							石・長	雲	角・輝	礫	赤	砂				口径	底径	器高	
第14図	85	926	I−4区・Ⅱ層 掘立柱建物 柱穴埋土層	高坏	口縁部 ～胴部	弥生土器		○				○	2.5YR5/6 5YR5/6	明赤褐色 明赤褐色	横ナデ・板ナデ 横ナデ・斜ナデ	28.2	−	7.9	高坏１類
第14図	86	203	F−2区 Ⅱ層	高坏	口縁部	弥生土器	○	○				○	7.5YR6/6 7.5YR6/6	橙色 橙色	ナデ・横ナデ 横ナデ	−	−	2.3	高坏１類 口唇部に小波状沈線文 外面に煤付着

第11表　穴倉遺跡　弥生土器　大甕１～３類　土器観察表

挿図番号	番号	注記番号	出土区 出土層 (遺構)	器種	部位	分類	胎土						色調 上段：外面 下段：内面		施文・調整 上段：外面 下段：内面	法量(cm)			備考
							石・長	雲	角・輝	礫	赤	砂				口径	底径	器高	
第14図	87	442・453・492 507・556・822	I・J−4区 Ⅱ層	大甕	口縁部～ 胴部	弥生土器	○	○		○		○	7.5YR6/6 7.5YR6/6	橙色 橙色	ナデ・横ナデ ナデ	21.6	−	10.3	大甕１類 88と同一個体
第14図	88	548	I −4区 Ⅱ層	大甕	口縁部～ 胴部	弥生土器	○	○		○		○	7.5YR6/6 7.5YR6/6	橙色 橙色	ナデ・横ナデ 横ナデ・ナデ	24.8	−	5.9	大甕１類 87と同一個体
第14図	89	605・607	I−4区 Ⅱ層	大甕	口縁部 ～胴部	弥生土器	○	○				○	2.5YR5/6 2.5YR6/6	明赤褐色 橙色	横ナデ・ナデ磨き 横ナデ・ナデ	21.4	−	10.4	大甕２類
第14図	90	660	I−4区 Ⅱ層	大甕	口縁部	弥生土器		○				○	5YR6/6 5YR6/6	橙色 橙色	横ナデ・ナデ ナデ	24.8	−	4.1	大甕２類
第14図	91	723・885	I−4区 Ⅱ層	大甕	口縁部	弥生土器						○	5YR6/6 7.5YR6/6	橙色 橙色	板ナデ・横ナデ ナデ ヘラ削り 丁寧なナデ	21.7	−	5.3	大甕２類 外面に煤付着
第14図	92	623	I−4区 Ⅱ層	大甕	口縁部 ～胴部	弥生土器		○				○	5YR6/6 5YR6/6	橙色 橙色	ナデ ナデ	18.0	−	7.9	大甕２類 外面に煤付着
第14図	93	134	F−１区 Ⅱ層	大甕	胴部	弥生土器		○		○		○	7.5Y6/6 2.5Y5/2	橙色 暗灰黄色	ナデ ナデ	−	−	4.3	大甕３類

第 12 表　穴倉遺跡　弥生土器　小型土器１・２類　土器観察表

挿図番号	番号	注記番号	出土区 出土層 (遺構)	器種	部位	分類	胎土						色調 上段：外面 下段：内面		施文・調整 上段：外面 下段：内面	法量（cm）			備考
							石・長	雲	角・輝	礫	赤	砂				口径	底径	器高	
第 14 図	94	1110・1223	G・H−4 区 Ⅱ層	小型壷	口縁部 〜胴部	弥生土器		○				○	7.5YR5/4 7.5YR5/4	にぶい褐色 にぶい褐色	ナデ ナデ	4.8	−	3.8	小型土器１類
第 14 図	95	1198	G−4 区 Ⅱ層	小型鉢	胴部〜 底部	弥生土器		○		○	○	○	7.5YR6/4 7.5YR6/4	にぶい橙色 にぶい橙色	ナデ・指頭圧痕 ナデ	−	1.6	3.8	小型土器２類

第 13 表　穴倉遺跡　成川式土器　土器観察表

挿図番号	番号	注記番号	出土区 出土層 (遺構)	器種	部位	分類	胎土						色調 上段：外面 下段：内面		施文・調整 上段：外面 下段：内面	法量（cm）			備考
							石・長	雲	角・輝	礫	赤	砂				口径	底径	器高	
第 15 図	96	1213・1234	G−3 区 Ⅱ層	甕	口縁部 〜胴部	成川式土器						○	5YR6/6 5YR6/6	橙色 橙色	横ナデ・ナデ 板ナデ 横ナデ 板ナデ後ナデ	20.3	−	16.1	外面に煤付着
第 15 図	97	707・715・722 879・901	I−4 区 Ⅱ層	甕	口縁部	成川式土器					○	○	7.5YR5/4 7.5YR5/4	にぶい褐色 にぶい褐色	ナデ 板ナデ	21.5	−	4.8	外面に煤付着
第 15 図	98	216	F−1 区 Ⅱ層	甕	口縁部	成川式土器				○	○	○	7.5YR6/6 5YR6/6	橙色 橙色	ナデ 横ナデ・ナデ	11.8	−	3.6	外面に煤付着 内面に黒斑
第 15 図	99	37	E−1 区 Ⅱ層	壷	口縁部	成川式土器					○	○	7.5YR6/4 7.5YR6/4	にぶい橙色 にぶい橙色	横ナデ・ナデ 横ナデ・ナデ	−	−	4.7	外面に煤付着
第 15 図	100	22・33	E−1 区 Ⅱ層	壷	胴部〜 底部	成川式土器				○		○	7.5YR6/6 2.5Y7/4	橙色 浅黄色	ナデ ナデ	−	10.4	7.4	
第 15 図	101	658・661・692 693・703・704 710・716・717 725・726・877 878・902	I−4 区 Ⅱ層	壷	胴部〜 底部	成川式土器					○	○	2.5YR5/4 7.5YR6/4	にぶい赤褐色 にぶい橙色	ナデ 丁寧なナデ	−	8.3	9.8	内面に黒斑
第 15 図	102	1182	G−4 区 Ⅱ層	壷	胴部〜 底部	成川式土器		○			○	○	5YR5/6 10YR7/4	明赤褐色 にぶい黄橙色	丁寧なナデ ナデ	−	5.6	4.0	外面に煤付着
第 15 図	103	82	E−1 区 Ⅱ層	壷	底部	成川式土器				○	○	○	10YR6/4 7.5YR7/6	にぶい黄橙色 橙色	ナデ・指頭圧痕 ナデ・指頭圧痕	−	3.4	3.5	ミニチュア土器
第 15 図	104	220	F−1 区 Ⅱ層	鉢	完形	成川式土器		○				○	7.5YR5/4 7.5YR6/4	にぶい褐色 にぶい橙色	ナデ ヘラナデ 指頭圧痕	10.8	4.3	7.1	外面に黒斑
第 15 図	105	367	J−4 区 Ⅱ層	鉢	口縁部	成川式土器	○					○	7.5YR6/6 2.5Y5/2	橙色 暗灰黄色	ナデ ナデ	20.1	−	3.3	内面に黒斑
第 15 図	106	79	E−1 区 Ⅱ層	鉢	口縁部	成川式土器						○	7.5YR6/6 7.5YR6/6	橙色 橙色	ナデ ナデ	6.6	−	3.7	

第 14 表　穴倉遺跡　内黒土器　土器観察表

挿図番号	番号	注記番号	出土区 出土層 (遺構)	器種	部位	分類	胎土						色調 上段：外面 下段：内面		施文・調整 上段：外面 下段：内面	法量（cm）			備考
							石・長	雲	角・輝	礫	赤	砂				口径	底径	器高	
第 15 図	107	408	J−4 区 Ⅱ層	鉢	口縁部	内黒土器	○	○				○	7.5YR6/6 7.5Y3/1	橙色 オリーブ黒色	ナデ 横ナデ	28.2	−	5.7	
第 15 図	108	1157・1199	G−4 区 Ⅱ層	坏	底部	内黒土器				○		○	5YR6/6 10YR4/1	橙色 褐灰色	ナデ ヘラ磨き	−	5.6	1.8	

第 15 表　穴倉遺跡　陶器　土器観察表

挿図番号	番号	注記番号	出土区 出土層 (遺構)	器種	部位	分類	胎土						色調 上段：外面 下段：内面		施文・調整 上段：外面 下段：内面	法量（cm）			備考
							石・長	雲	角・輝	礫	赤	砂				口径	底径	器高	
第 15 図	109	—	—	急須？	蓋	陶器 (薩摩焼)						○	7.5YR4/2 7.5YR5/4	灰褐色 にぶい褐色	施釉・ロクロナデ ロクロナデ	8.8	6.0	2.4	黒薩摩 褐釉色

第 16 表　穴倉遺跡　Ⅱ層出土石器　計測表

挿図番号	番号	注記番号	出土区	出土層 (遺構)	器種	石質	法量（cm・g）				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量	
第 19 図	110	239	K−4 区	Ⅱ層	石鏃	安山岩	1.85	1.55	0.3	0.7	
第 19 図	111	353	J−4 区	Ⅱ層	磨石	砂岩	10.1	3.2	2.4	129.73	棒状

第Ⅳ章　調査のまとめ

はじめに

穴倉遺跡は農村総合整備事業有明地区に起因する農道11号中方限線の農道整備事業により全面調査を実施した遺跡である。農道 11 号中方限線は平成 9 年度において 280m部分、平成 15 年度に 422.25m部分の全面調査を行った。平成 15 年度に全面調査を行った 422.25 m部分は「穴倉Ｂ遺跡」として平成 19 年度に報告書作成がなされている。

第１節　遺物

土器は第Ⅲ章で述べたとおり主に弥生時代の甕・壷類を中心とした土器群が出土し、その分類を器種毎に細かい基準を設けた。その分類の結果から、甕は全体的な特徴として口縁部が「く」の字状に外反若しくは立ち上がりが強く、比較的胴部の張りが顕著ではないことが特徴的であり、松木薗式土器に比定すると思われる。また壷は口縁部が二叉状口縁を呈するもの（壷１類）、大きく外反するもの（壷２類）、緩やかに外反するもの（壷３・４類）と分かれる。「口縁部が二叉状口縁を呈するもの（壷１類）」「大きく外反するもの（壷２類）」は山ノ口Ⅱ式土器の特徴をもつものであるが、「緩やかに外反するもの（壷３・４類）」は松木薗式土器の特徴をもつものである。従って今回の調査において出土した弥生土器は弥生時代後期から終末期にかけてのものと考えられる。また壷６類は重弧文や平行沈線文は見られないが、胴部の形状が算盤玉状の特徴から免田式土器に比定されると思われる。また成川式土器について、甕は「く」の字状の口縁部が直行し、比較的短頸である。また頸部に貼付突帯が見当たらない特徴から中津野式土器に否定されると思われる。

第２節　遺構

今回の調査ではⅢ層上面で遺構が検出された。検出遺構は掘立柱建物１基、土坑１基、柱穴17 基であり、調査面積に対して比較的遺構密度が疎である。Ｅ－１・２区で検出された掘立柱建物１の柱穴からは高坏（87）が出土したことは第Ⅲ章で述べたとおりであるが、この高坏は前節で述べたとおり弥生時代後期頃の器形の特徴をもち、松木薗式土器に比定されるものと思われ、弥生時代後期から以降に使用された可能性が高い。

平成 15 年度調査成果（穴倉Ｂ遺跡）との遺物・遺構分布の傾向

今回成果報告を行った「穴倉遺跡」、平成 19 年度に成果報告を行った「穴倉Ｂ遺跡」は「周知の遺跡」である「穴倉遺跡」（69－117）の範囲内での調査を行ったものである。平成19 年度の成果報告では、包含層が削平を受けていたため、弥生時代・古墳時代の遺物は確認されず、アカホヤ層上面より掘り込みの浅い掘立柱建物が９基確認されている。アカホヤ層上面で確認された掘立柱建物は南南東軸・南南西軸の２時期に別れ、今回報告された掘立柱建物１は南南西軸に符合し、同時期に使用された可能性も否めない。これらのことから、「穴倉遺跡」（69－117）全体に、弥生時代後期から以降の遺構群が広がっている可能性がある。

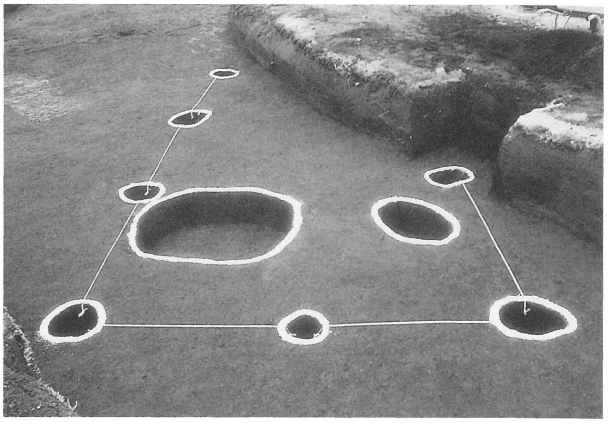
【参考文献】

『鹿大考古　第６号　成川式土器再考』　中村直子　1987　鹿児島大学考古学会
『日本土器辞典』　大川　清・鈴木公雄・公楽善通　1996　雄山閣
『王子遺跡』　立神次郎　1985　鹿児島県教育委員会
『大島遺跡』　宮田栄二・平小場秀男　2005　鹿児島県立埋蔵文化財センター
『堂園遺跡Ｂ地点　堂園遺跡Ａ地点（追加調査）』　八木澤一郎・池畑耕一・吉井秀一郎・馬籠亮道　2008　鹿児島県立埋蔵文化財センター
『浜町遺跡』　青﨑和憲　2000　鹿児島県立埋蔵文化財センター
『下堀遺跡・大崎細山田段遺跡』　内村憲和　2005　大崎町教育委員会
『御里窯跡』　石一之　2003　加治木町教育委員会
『仕明遺跡』　中水忍・出口順一朗・堂込秀人・前迫亮一・横手浩二郎・和田るみ子・東徹志　2005　有明町教育委員会
『上苑Ａ遺跡・穴倉Ｂ遺跡』　出口順一朗・東徹志・中水忍・中村直子・内山伸明　2008　志布志市教育委員会

図　版

図版１　　穴倉遺跡　全面調査

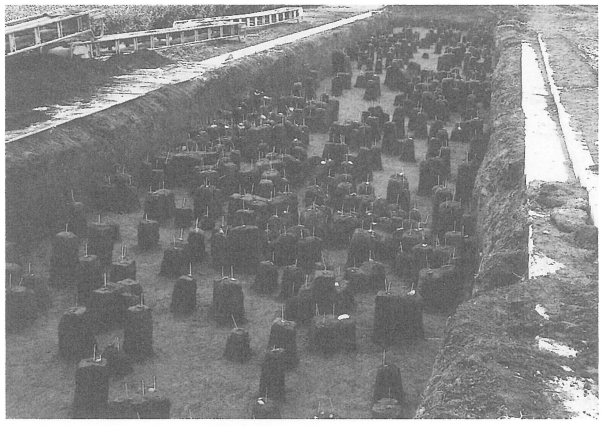
Ⅲ層上面検出遺構　完掘状況



掘立柱建物１・土坑１　完掘状況

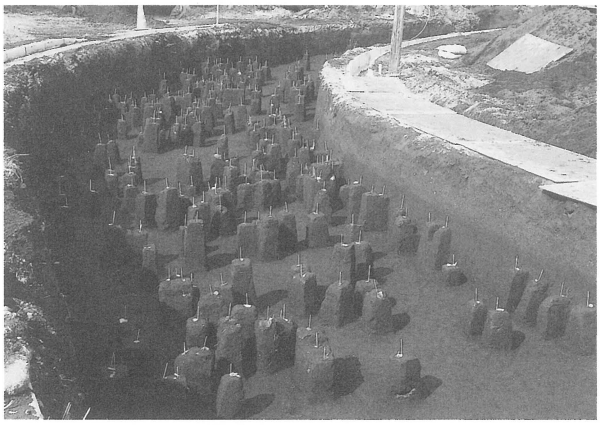
土層断面

鉢（106）　出土状況



Ⅱ層遺物出土状況　1

発掘調査　作業風景（掘り下げ作業）



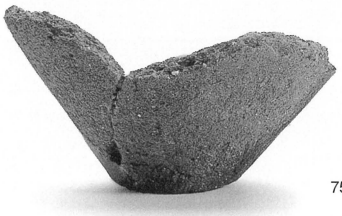
Ⅱ層遺物出土状況　2

発掘調査　作業風景（検出面精査作業）

図版２　　穴倉遺跡　弥生土器　１

36

37



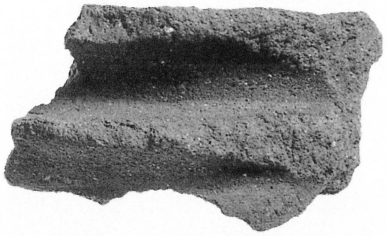
75

76

79

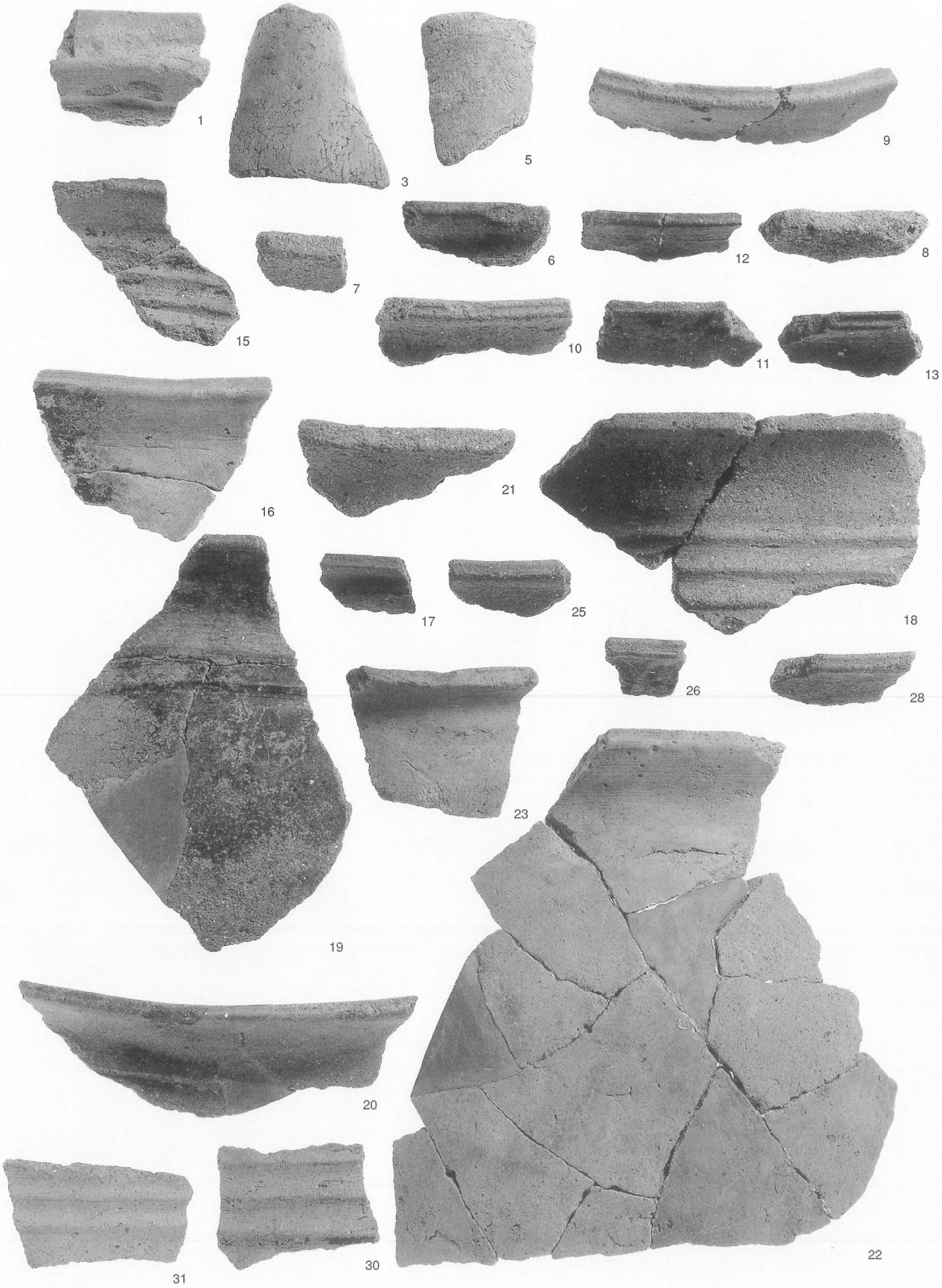
38　95

87

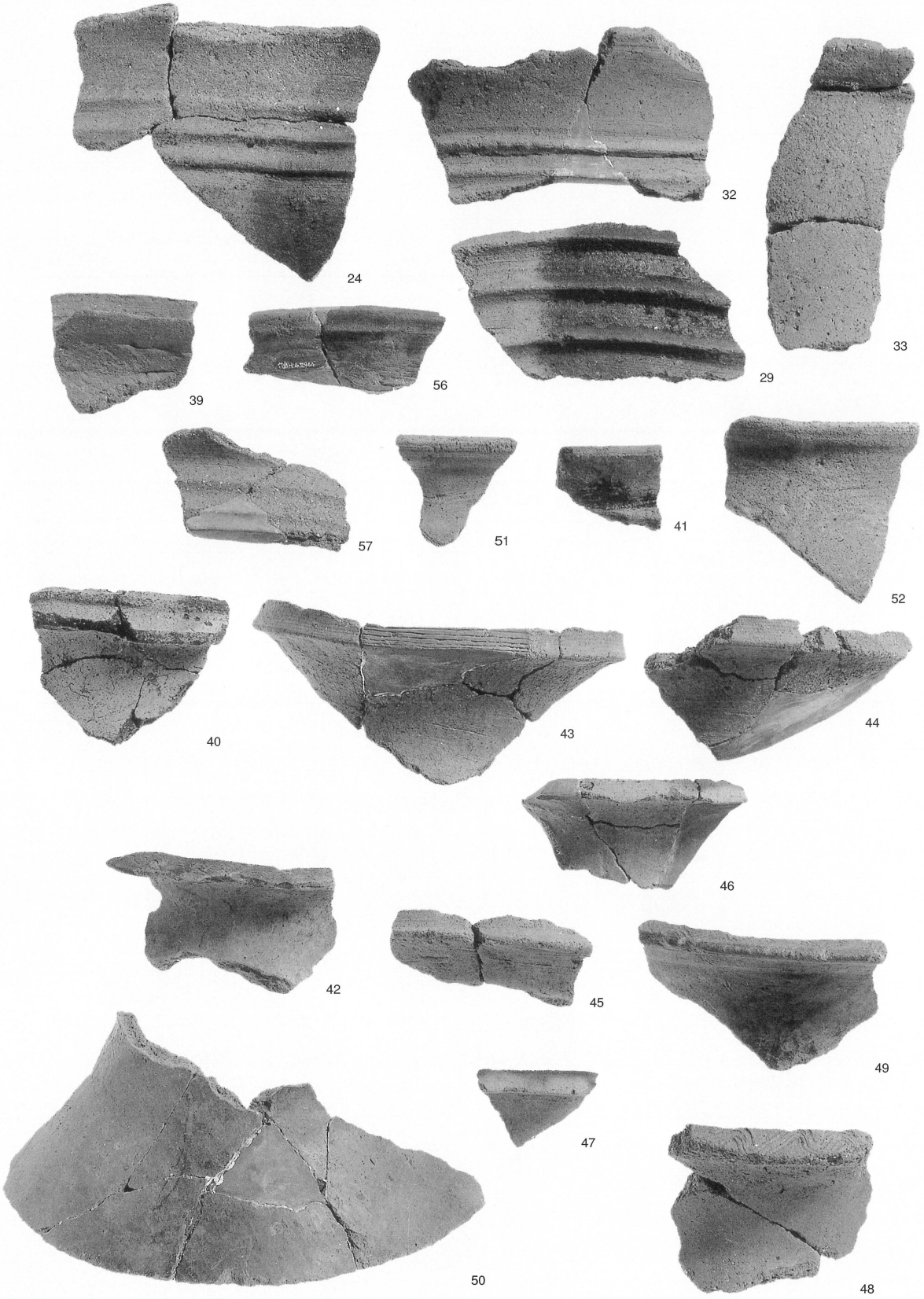


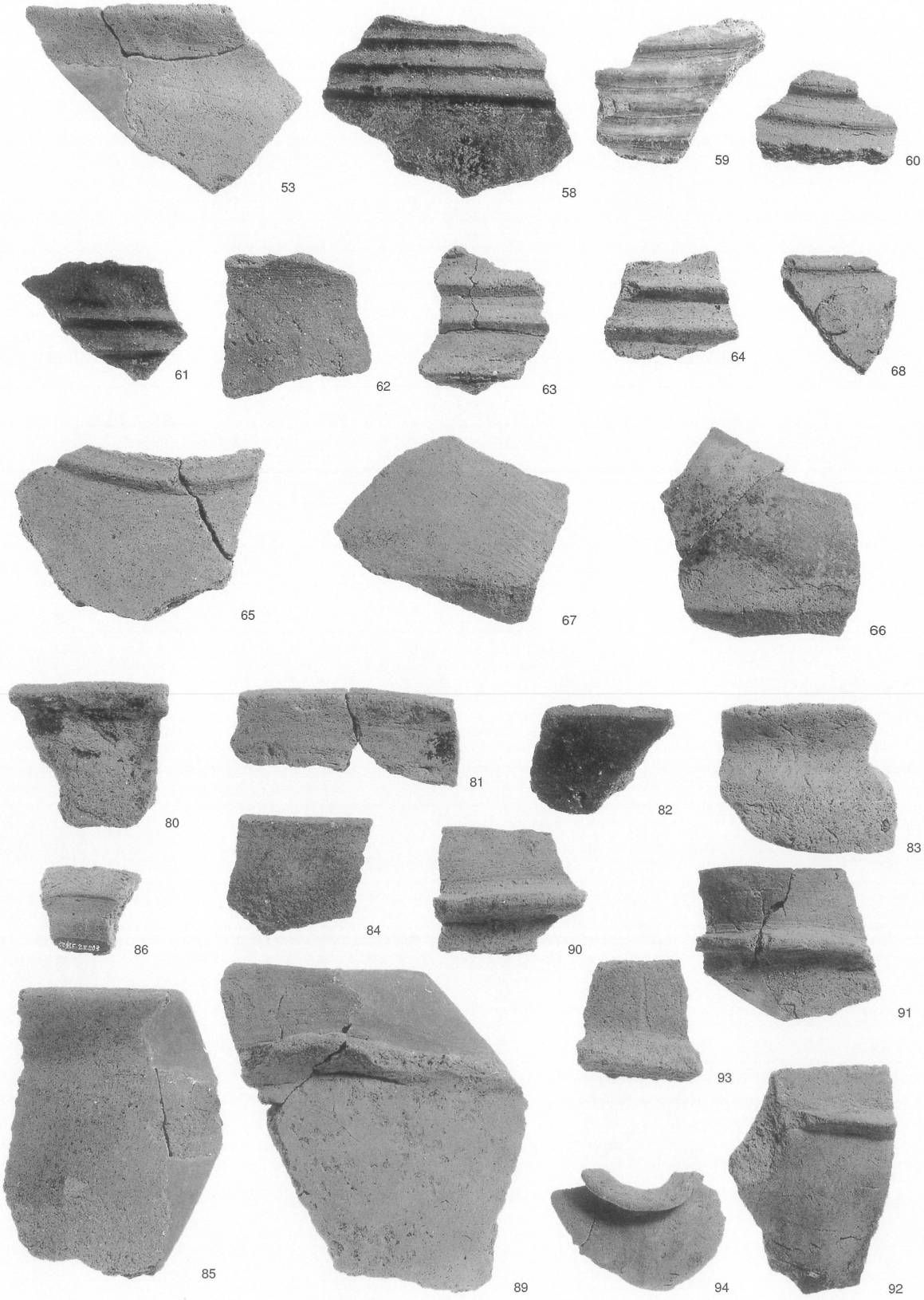
88

図版３　　穴倉遺跡　弥生土器　２

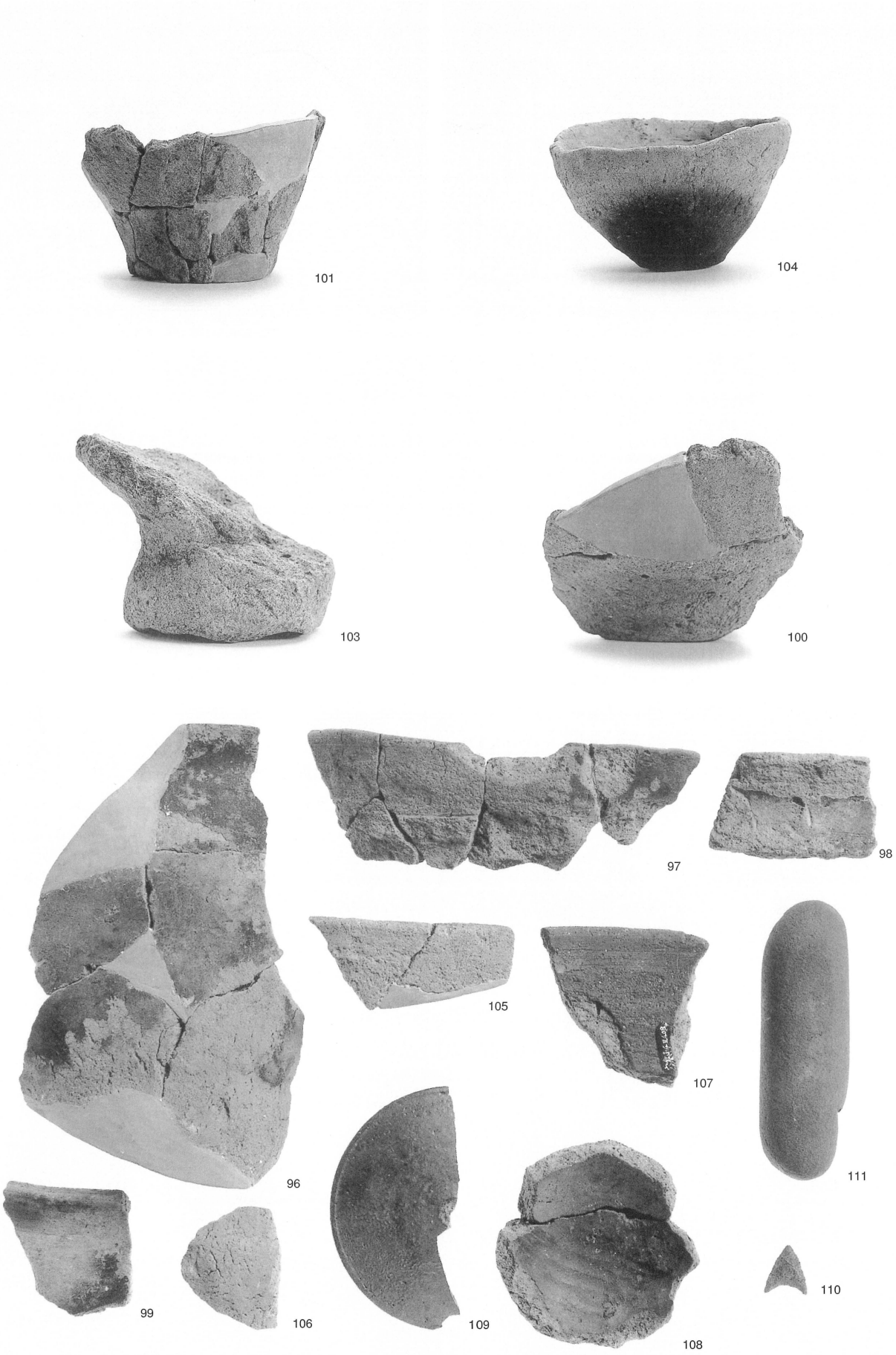


図版４　　穴倉遺跡　弥生土器　３




53
58
59
60
61
62
63
64
68
65
67
66
80
81
82
83
86
84
90
91
93
85
89
94
92

図版 6　　穴倉遺跡　成川式土器・内黒土器・陶器



報 告 書 抄 録

ふ り が な	あなくらいせき
書 名	穴 倉 遺 跡
副 書 名	農村総合整備事業　有明地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シ リ ー ズ 名	志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	4
編 著 者 名	出口順一朗・中水　忍
編 集 機 関	志布志市教育委員会
所 在 地	〒899－7192 鹿児島県志布志市志布志町志布志２丁目１番１号　TEL099－472－1111
発 行 年 月 日	２００９年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯 ° ′ ″	東 経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あなくらいせき 穴倉遺跡	かごしまけんしぶしし 鹿児島県志布志市 ありあけちょうのがみ 有明町野神 あざあなくら 字穴倉	462217	69－117	31° 48′ 78″	130° 98′ 78″	全面調査 19980119 ～ 19980213	全面調査 750 ㎡	農道整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	主な遺構	特記事項
穴倉遺跡	散布地	弥生時代 古墳時代	弥生土器 成川式土器	掘立柱建物・土坑	

要 約	主に弥生時代の遺跡である。出土遺物の分布に一定範囲に集中する傾向が見られたが、遺物数に比べて生活遺構がほとんど確認できなかった。そのため遺跡の近隣に竪穴住居等の生活遺構が確認できる可能性がある。

終　わ　り　に

本遺跡は、事業担当課との意思疎通が図られず、工事ストップをかけてイレギュラー的に全面調査を実施せざるを得ない現場であったため、満足に工期も取れずに実施されたことが残された図面や写真に当時の担当者の労苦が伺われました。正月も明けて間もないかなり寒い時期で、本当に大変だったと思います。

さらに、この調査報告も以後の事業量の爆発的な増加、発掘調査の前倒しや報告書作成の優先順位のために、調査から１０年を経過してからの報告書作成になってしまったため、当時の情報や記憶の風化により、報告書の記載にかなりの不備があることは否めません。

また現場写真に写っていた作業員さんの中には、今は故人となられた方もおり、年月は無常なものであると痛感させられます。

発掘調査・報告書作成など、私が埋蔵文化財に携わるようになって、１０年目に入ろうとしていますが、これまでに支えてくれたみなさんのことを、この頃富みに思い返すことが多くなりました。生きていく上でたくさんの人たちと関わって、同じ環境の中で労苦を分かち合った友がいて、今生きている自分がある。本当にありがとう。

（Ｊ．Ｄ）

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（４）

穴倉遺跡

発行日：２００９年３月３１日
発　行：鹿児島県志布志市教育委員会
〒899-7192　鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目１番１号
TEL　０９９－４７２－１１１１
印刷所：西文社印刷株式会社　志布志支店
〒899-7103　鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目 16 番 21 号
TEL　０９９－４７１－１３２８